

『三国史記』記載の「高句麗」地名より見た 古代高句麗語の考察

古代朝鮮語研究会代表 馬 淵 和 夫
李 寅 泳
大 橋 康 子

は し が き

本論文は『文芸言語研究・言語篇』3(1978)に発表した「『三国史記』記載の百濟地名より見た古代百濟語の考察」に続くものである。われわれの研究会から、今年度、洪思満氏が抜けたのは、同氏が韓国へ帰り、もとの慶北大学校助教授の職に復したからである。馬淵はこの7月に韓国を訪問し、ソウル大学校師範大学の諸先生方と筑波大学教官有志との間に開かれた教員養成の問題についての討論会に出席し、ついで韓国南方各地を巡遊した。ことに印象深かったのは、古代三国時代の百濟の古都扶余と、新羅の古都慶州をおとずれたことである。それぞれに今もなお古代百濟語や新羅語がここかしこから聞えてくるような感懷を催し本論文の推進に一層の意欲を燃したことであった。なお洪思満助教授には、慶州およびソウルにおいて多大の御配慮をいただき、李寅泳氏にはソウルにおいてお世話ねがったことを、ここに記して感謝の意を表わしたい。

内容 はしがき

- 第一章 古代日本語と高句麗語との関係についての諸説
- 第二章 各個地名の考証
- 第三章 音韻組織

第一章 古代日本語と高句麗語との関係についての諸説

内藤湖南と新村出

『三国史記』にのせられている 高句麗地理志記載の地名から、古代日本語の

数詞と高句麗語との関係を最初に指摘したのは内藤湖南博士であったようである。新村出博士によれば、「日本満州交通略説上」（『叡山講演集』明治40年8月講、11月刊）にその説が公表されたという。これを受けて、新村出博士は「国語及び朝鮮語の数詞について」（『芸文』7ノ2、4 大正5年2月、4月、のち『東方言語誌叢考』『言葉の歴史』等所収）という論文を発表されて、『三国史記』卷三十七高句麗地理志の地名表中から、

三峴県 一云 密波兮

五谷県 一云 兮次云忽（兮の字は、弓、于にも作る。『輿地勝覧』『文献備考』によって于次吞忽を正とする。）

七重県 一云 難隠別

十谷県 一云 徳傾忽

の4地名をあげ、「密」が日本語のミツもしくはミに、「于次」が日本語のイツに、「難隠別」が日本語のナナヘに、「徳」が日本語のトに、似ているといっている。その結論として、

以上三・五・七・十の四数詞に於て、日鮮語間の類似の程度にも多少の差はあり、又確實さにも幾分の相違はあるが全然偶然の暗合とは見られまいと思ふ。而も十中の四ばかりの類似であるから、比較言語学者には非常の好資料を供し、同系論者には幾分の強みを与へるのである。

といっている。この説は数詞の比較が言語比較上の重要なきめ手であるという点からいって、それまでになかった言語系統論上の有力な証拠と目されるに至った。しかしこの4語の解釈については、当時としてはまだ十分な証明ができなかったために、定説とされるまでには至らなかったが、もし新村博士の結論を強調するならば、1から10までの10数詞の中で、記録されている4数詞でも日本語との類似が指摘できるのであるから、記録されていない6数詞においても日本語との類似が指摘できる可能性は大きいといえるであろう。つまりこの6数詞は日本語と相異しているのではなく、未知なのであるから、日本語と高句麗語の数詞の類似は4割の可能性ではなく、 $4/10 + (6 \times 4/10)/10 = 0.4 + 0.24 = 0.64$ 、すなわち6.4割もしくはそれ以上の可能性があるといってもよいはずなのである。しかしこれを言うためには、上記4語の正統な手続きによる復元がなければならぬことはいうまでもない。

前間恭作・坪井九馬三

前間恭作氏およびその説に附言した坪井九馬三氏の論文は「三韓古地名考補正」（『史学雑誌』36ノ7、大正14年、『前間恭作著作集』（下）京都大学文学部

国語学国文学研究室編、昭和 49 年、所収)として発表された。この論文は、新羅・百済・高句麗の三国に分けて、それぞれの地名中考証に値するものを探り上げて、表記・現地名との対照・語源にふれたものであり、本論文で問題としている高句麗の地名について 17 語を挙げて論じている。そのうち、日本語と関係づけたのは下の 4 語である。

呑と日本語のタニ(谷)(坪井氏説)

遼と日本語のカフ(飼)(坪井氏説)

古次と日本語のクチ(口)(坪井氏説)

悩・奴・内・乃と日本語のナレ(川)ナイユル(地震)(坪井氏説)

また、前間氏は、高句麗地名としながらも、若干のものは新羅語であろうと推定している。

梁^{洞陰} 僧^梁 梁^嶺 これは二つとも羅人の作った地名であると存じます。(p. 530)

句麗でこの梁(Tor)の地名はないやうでございます。(p. 531)

吐^上 隄^上 これはみな羅人の命名した地名で「吐」の字をつけた主夫吐^{長堤}

吐^大 隄^上ならびに東吐^{棟隄}、それから「上」の字の上忽^{車忽}はみな羅名と存じます。(p. 532)

これらの他にも新羅語と区別しようという意見が見られ、前間氏の見識の高さを知ることができ、本論文の主旨とも通うものがある。

河野六郎

河野六郎博士もおおむね新村説を支持した(「古事記に於ける漢字使用」<『古事記大成 3 言語文字篇』昭和 31 年、『河野六郎著作集第 3 巻』所収、昭和 55 年)。博士はさらに、

玄驍^県 本推良火^県 一云 三良火

という例をあげ、

推は mir-「推ス」の訓読であるから、三を mi 或いは mir-(mid-?)を表わしている。

として、新村説を補強し、結論として、

若しこれらの古土名がそこに嘗て居住した民族の言語を反映したとすれば、倭人の痕跡は南部に限らず、古くは中部にまで及んでいることになる。これらは、考え様では倭人の北方から南下の迹であるかも知れない。(P. 179)

といている。河野博士の考えは、これらの語を高句麗語と きめてしまわずに、「そこに嘗て居住した民族の言語を反映したとすれば」という慎重な態度を持している。ここにはまた氏の、現代朝鮮語の成立についての考え方もその基底にある。すなわち現代朝鮮語の成立について次のように氏はいう。

言語的には新羅語が現代朝鮮語の祖先であり、その基礎は辰韓の斯盧の言語である。しかし、斯盧から新羅へ発展し、新羅が統一する過程には韓語諸方言を吸収し、百濟語の土語（これも韓語方言）及びその語彙的要素（引用者注、扶余族の言語的要素といってもよい）を採り入れ、更に高句麗語を借用することも考えられるから、現代朝鮮語の根幹は韓族の言語の性格を具えているであろうが、かなり異質的な要素を含んでいると思われる。（p. 182）

実際、地名のごとき永続性の強いものについて、高句麗地名として採録されているからといって、直ちにそれを高句麗語であるときめることには、かなり慎重でなければならないであろう。

村山七郎

この問題を広い見地から取り上げ、新村博士の挙げられた4例の解釈を肯定した上で、さらに日本語と類似した22例を指摘されたのは村山七郎氏であった（『日本語および高句麗語の数詞——日本語系統問題に寄せて——』＜『国語学』48輯、昭和37年）。その22例とは次のものである。

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| (1) 古斯(玉、<日本語>クシロ) | (2) 内(壤、<日>ナ・キ、ウブス・ナ) |
| (3) 内米(海、<日>ナミ) | (4) 甲比(穴、<日>カヒ) |
| (5) 尸臘(白、<日>シラ) | (6) 烏斯含(兎、<日>ウサギ) |
| (7) 忽次～古次(口、<日>クチ) | (8) 次若(首(頭)＜角、<日>ツノ) |
| (9) 廻(足、<日>クエ(蹴)) | (10) 於乙(泉、<日>キ) |
| (11) 功木(熊、<日>クマ) | (12) 買(水～川、<日>ミ) |
| (13) 忽(城、<日>キ) | (14) 乃勿(鉛、<日>ナマリ) |
| (15) 居尸(心、<日>ココロ) | (16) 達(山＝高、<日>タケ・タカ) |
| (17) 盼(木、<日>キ) | (18) 也派(母、<日>ハハ) |
| (19) 骨(黄、<日>キ) | (20) 伏斯(深、<日>フカシ) |
| (21) 烏斯(猪、<日>ウシ) | (22) 波衣～波兮(巖、<日>イハホ) |

なお上記22語中にはいっていないが、新村氏のすでに指摘された語で村山氏の賛意を表されたものに、

難隠別(七重)の「別」(重)日本語へ

徳頓忽(十谷城)の「頓」(谷)、および(弓次云忽の「云」を「吞」の誤りとして)、于次吞忽(五谷郡)から「吞」(谷)をとり出し、これを日本語タニと関係づけている。

この2例も上記語例中に入れるべきであろう。

これらの例から、古代日本語と高句麗語との密接な関係は次の諸点に現われている、としている。(P. 9)

- (1) 前記4数詞の合致。
- (2) 残されている唯一の高句麗親族呼称「母」の合致(ただし、これは派が派の、也が巴の誤記と解した場合)。
- (3) 身体部分名称(「口」、「足」)の合致(ただし「足」について言えば、日本語 kuwe「蹴」が本来「足」を意味したと解した場合)。
- (4) 後に見るように、接頭辞 sa の用法が日本語と同じようである。
- (5) 合成語が日本語的である。(例略)
- (6) 上記(1)、(2)、(3)以外でも、次のような重要単語が共通である。

壤(土地) 山=高 海 深 谷 白 巖 黄 峽 水

以上によって、「高句麗語は系統上、日本語に非常に近い言語である」と結論しても、大きな誤りはないであろう。(P. 9)

とし、さらに、高句麗語と朝鮮語との類似を挙げ、

これらは高句麗語から高麗語(引用者注、これが何を指すか不明。統一新羅王朝と高麗王朝とを指すか)に借用されて現代朝鮮に伝えられたものであるか、或いは同源のものもあろう。(P. 10)

として、ともかく高句麗語にはツングース的要素を含んでおり、さらにトルコ語とも共通性をもっているから、

日本語も高句麗語とともに匈奴的要素を伝えているのではないかと思われる。(P. 11)

と結んでいる。

ただし、村山氏はその後の著『日本語の語源』(昭和48年、弘文堂)においては、上記22語のうち、「白・高・木・母・角」の5語については南方起源説に変っているので、17語に減ずるであろう。また、「口」については上記論文の中でかなりのスペースをさいて高句麗語説をあげながら、日本語の起源の中ではこの語をとりあげていないのは、いまだ確実と見ていないからであろうか。

また「母」が高句麗語から消えたので、上掲のまとめの(2)は消えることに

なるし、(4)の接頭語 sa も疑問である。これは sap で l 語と見るべきものと思う(前掲恭作氏「三韓古地名考補正」p. 507)。また語例中(10)の日本語「泉」を「キ」とされた(wi<*wui<*bul)が、「泉」はア行の「イツミ」であって、ワ行の「イ」ではない。ワ行の「イ」は「山の井」「井戸」の「イ」であって、語源的には「堰」の意である。「イツミ」は「出づ水」の意であろう(『日本国語大辞典』その他)。

李 基文

上の村山氏の論文にも若干の紹介があるが、この問題についてソウル大学教授李基文博士の研究は注目される。李博士の研究は『国語史概説』(1961年ソウル、1972年改訂版、日本語訳1975年大修館)にあり、その他は前号文献目録に収めてあるものであるが、ここでは最近の日本語の論文「日本語系統論によせて」(『言語』Vol. 3, No. 1, 1974)によってその概要を知りうる。李博士は『三国史記地理志』に現われる高句麗の地名から再構することのできる高句麗語の単語は80にのぼり、そのうちかなり確実性をもつものは50そこそこであることを述べ、新村博士の研究にふれた後で、

私の仮説は日本語の夫余系統説と呼ぶことができるが、これは従来いかにして日本語と韓国語(新羅語の系統を引く言語)、日本語とツングース語の比較が超えがたい障壁にぶつかってきたかを合理的に説明するように思われる。すなわち、日本語は夫余諸語と直接的な関係にあり、韓諸語やツングース諸語とは間接的な関係にあったからであると説明することができるであろう。夫余諸語の消滅によって生じたミッシング・リンクが、今日韓国語および日本語の系統研究を難しくしているのである。(p. 39)

とのべている。

金 思燁

李基文博士の説に対して、現在日本にて古代日本語と古代朝鮮語との関係进行研究している金思燁氏は「高句麗・百済・新羅の言語」(『日本古代語と朝鮮語』昭和50年毎日新聞社)において、次のように批判している。

だいたい地名というのは歴史的に一つの対象に固着して長く伝承されるものであるため、表記された地名全部がそのまま高句麗語であるとはいえないのであります。それは、地名の中には高句麗族がその地に定住する以前の他の種族が呼称した地名も、あとから来た高句麗族が受けついただのもありうるからであります。

この批判の立脚点は、本論文の主旨と一致するものであって、われわれとしては妥当なものと認めざるを得ない。氏は高句麗語と新羅語との比較を、主として官職名と人名とから行って、この二語が異質のものではないことを論証しようとしている。この点について言及することは、この論文ではいまだ時期尚早であろうからここにはふれないが、官職名、人名の方に固有の言語が反映するということは十分考慮されなければならない。本論文の今後の課題としたい。

李基文博士に対して批判的であったもう一人の学者は、フランスの日本学の元老であった故 Charles HAGUENAUER 博士である。その最後の著“Nouvelles recherches compare'es sur le japonais et les langues altaïques”（‘Bibliothèque de l'institut des hautes études japonaises’ 1976 Collège de France）に述べているが、ただ単に些細な資料だからその研究に価値がないという主張のようであるが、われわれはそうばかりともいえないのではないかと思っている。

如上列举した諸説は、『三国史記地理志』卷三十七および卷三十五記載の故高句麗南界の地名を、高句麗語によるとの前提に立つものと、この前提を疑うものとに分かれているが、従来の主流は前者であったようである。しかし、すでに前稿で李寅泳君によって述べられたごとく、これらの地が高句麗の領有であったのは比較的短い期間であり、ことに漢州、つまり百済の旧都の所在地は、78年間に過ぎない。それまでは百済建国より 389 年間百済の領地であった。しかもこの百済ももと卒本扶余より移動してきたのであるから、この地の命名は、その原住民の言語によったものかも知れない。この地の原住民はおそらく濊族であろう。しかし濊族も夫余の一族であるから、同族である百済・高句麗と比較的よく混和したかも知れない。したがってその言語が古代日本語と関連ありとすれば、同じ扶余族であるところからきた結果かも知れず、そうであれば、特に高句麗語・百済語・濊語という必要はないかも知れない。しかしこれらのことはほとんどが想像の域を出るものではなく、微少な言語現象をとらえての発言であるから、さらに不明な部分を明らかにする努力を重ねるべきであろう。

（馬淵和夫）

第二章 各個地名の考証

各個地名の考証にさきだって、まず、いわゆる高句麗地名の記載された資料を検討し、その結果、新羅地名の性格をもつものは新羅による地名としてまとめた。すなわち、従来高句麗地名とは『三国史記』巻三七に記載された鴨緑以北の地名群と漢山・牛首・何瑟羅の三州の列記地名を統一的に「高句麗地名」（すなわち、高句麗語）として扱っているが、三州はもともと統一新羅の九州の配置によって生じた概念¹⁾であることから、三州の列記地名を同質の「高句麗地名」とみることに対する疑問が残ると思われるからである。

したがって、三州の列記地名の中で、表記法及び用字面において、新羅の(尚州・良州・康州)のそれと共通している点は、新羅による九州の設置と関連する問題と考えられようが、ここでは、その詳細をはぶく。(新羅の用字法については次回に詳述の予定。)ただ新羅による地名と考えられるもので、網羅的に「高句麗地名」とするには、言語研究における原理的な誤りをおかす危険性があると思うので、とりあえず三州の列記地名の中で、新羅地名の性格をもつものは「高句麗地名²⁾」と区別し、つぎのような分類を行なった。

1 高句麗地名

(1) 「郡」・「県」を付けない地名。(「忽」「買」「達」「押」「吞」が付いている)。

漢山州

仍忽、上忽(車忽)、奈兮忽、妙伏忽、買忽(一云水城)、首尔忽、内乙買(一云内余米)、功木達(一云熊門山)、烏斯含達、扶蘇岬、屈於押(一云紅西)、冬比忽、冬音忽(一云鼓監城)、内米忽(一云池城一云長城)、冬忽(一云于冬於忽)、今達(一云薪達一云息達)、加火押、

牛首州

冬斯忽、於支吞(一云翼谷)、買尸達

何瑟羅州

¹⁾ 藤田亮策氏「新羅九州五京攷」(『朝鮮学報』第五輯、1953、115)。なお『三国史記』地理志全般についての史料を批判したもので、井上秀雄氏に「三国史記地理志の史料批判」(『朝鮮学報』第二一・二二輯)がある。

²⁾ 鴨緑以北の高句麗地名群と九州の設置の際地名改正上の資料と思われるもの。

達忽、習比谷一作吞

(2) 漢語訳のある地名

()内は新羅による改正名である⁸⁾。

漢山州

(南川郡)一云南買、駒城一云滅鳥、(述川郡)一云省知買、(楊根郡)一云去斯斬、(釜山郡)一云松村活達、(栗木郡)一云冬斯盼、(獐項口郡)一云古斯也忽次、(王逢郡)一云皆伯、(買省郡)一云馬忽、(臂城郡)一云馬忽、(獐項郡)一云古斯也忽次、(麻田淺郡)一云泥沙波忽、(津臨城郡)一云烏阿忽、(穴口郡)一云甲比古次、(高木根郡)一云達乙斯、(大谷郡)一云多知忽、(水谷城郡)一云買旦忽、(十谷郡)一云德頓忽、(五谷郡)一云弓次云忽、(漢城郡)一云漢忽一云息城一云乃忽、鵠鵠城一云租波衣一云(鵠巖郡)、(獐塞郡)一云古所於、北漢山郡一云平襄

牛首州

(横川郡)一云於斯買、(奈吐郡)一云大提、(深川郡)一云伏斯買、(楊口郡)一云要隱忽次、(猪足郡)一云烏斯廻、(王岐郡)一云皆次丁、(三岨郡)一云密波兮、(狹川郡)一云也尸買、(大楊管郡)一云馬斤押、(文岨郡)一云斤尸波兮、(母城郡)一云也次忽、(水入郡)一云買伊郡、(赤木郡)一云沙非斤乙、(猪闌岨郡)一云鳥生波衣一云猪守、(淺城郡)一云比烈忽、(康谷郡)一云首乙吞、(泉井郡)一云於乙買、(東墟郡)一云加知斤

何瑟羅州

(遼城郡)一云加阿忽、(僧山郡)一云所忽達、(猪遼穴郡)一云烏斯押、(平珍岨郡)一云平珍波衣、(休壤郡)一云金惱

(3) ただ「郡」「県」だけ付けられた地名

漢山州

仍斤内郡、仍伐奴県、齊次巴衣県、主夫吐郡、骨衣内県、伊珍買県、波害乎史県一云額、若只頭恥県一云朔頭一云衣豆、冬音奈県一云休音、首知県一云新知、今勿奴郡一云万弩、買召忽県一云弥鄒忽、童子忽県一云仇斯波衣、平淮押県一云別史波衣淮一作唯、述尔忽県一云首泥忽、達乙省県、於斯内県一云斧壤、阿珍押県一云窮嶽、刀臘県一云雉嶽城、夫斯波衣県一云仇史岨

牛首州

加支達県、夫斯達県、客連郡客一作各一云加兮牙、菁達県一云昔達、買谷県

⁸⁾ この改名の時期は、部分的なものをのぞいて、神文王 5~8 年(六八五~八)の九州整備時と考えられる(藤田亮策 1953; 90、井上秀雄 1961; 672)。

何瑟羅州

東吐県、吐上県、也尸忽郡、乃買県

(4) 鴨緑以北の高句麗地名群

北扶餘城州 本 助利非西、節城 本 葱子忽、豊夫城 本 肖巴忽、新城州
 本 仇次忽(或云敦城)、桃城 本 波尸忽、大豆山城 本 非達忽、遼東城
 州 本 烏列忽、安市城 舊 安寸忽(或云 九都城)、鉛城 本 乃勿忽、牙
 岳城 本 皆尸押忽、驚岳城 本 甘弥忽、積利城 本 赤里忽、木銀城 本
 召尸忽、犁山城 本 加尸達忽、甘勿主城 本 甘勿伊忽、心岳城 本 居
 尸押、屠夫婁城 本 肖利忽、朽岳城 本 骨尸押、穴城 本 甲忽、銀城
 本 折忽、似城 本 史忽

2 新羅による地名(「梁」「火」「岐」「竹」などの字、またはすでに 「浦」「山」「川」などの表意的用字を語尾にもつ。)

漢山州

骨乃斤県、皆次山郡、奴音竹県、蛇山県、唐城郡、黔浦県、梁骨県、夫如郡、
所邑豆県、徳勿県、国原城—云 未乙省—云 託長城、道西県—云 都盆

牛首州

伐力川県、砮峴県、平原郡(北原)、沙熱伊県、赤山県、古斯馬県、及伐山郡、
伊伐支県—云 自伐支、管述県、薩寒県、奈生郡、乙阿旦県、于烏県—云 郁烏、
酒淵県、斤平郡—云 並平、薺泚川県—云 薺川

何瑟羅州

支山県、穴山県、岐淵県、波利県、平珍也郡、青己県、屈火県、伊火兮県、干
尸郡、阿兮県、羽谷県、翼峴県—云 伊文、道臨県—云 助乙浦、鵠浦県—云 古衣
浦、竹峴県—云 奈生於、湍若県—云 沕兮、波旦県—云 波豊、助攬郡—云 才攬、
悉直郡—云 史直

3 そ の 他

- ① 仇乙峴(—云 屈迂) 今豊川
- ② 闕口 今儒州
- ③ 栗口(—云 栗川) 今殷栗県
- ④ 長淵 今因之
- ⑤ 麻耕伊 今青松県
- ⑥ 楊岳 今安嶽郡

- ⑦ 板麻串 今嘉禾県
- ⑧ 熊閑伊 今水寧県
- ⑨ 甕迂 今甕津県
- ⑩ 付珍伊 今永康県
- ⑪ 鵠島 今白嶺鎮
- ⑫ 升山 今信州

三州の列記地名の中で、かなり異質な地名としてこれら十二名がふくまれている。ここで今とあるのは『三国史記』の成った高麗時代の名称であり、旧地名の場合は卷三五に全くみえなく、後世の地理志(高麗史・新增東国輿地勝覧)でも新羅時代に郡・県を置いたとしていない。また、これら地名と地理的に接近している地名がいずれも「忽・押・達・波衣」など高句麗地名として特徴のある語尾をもっている点からもその性格を異にしている。したがって、他の地名と同質のものとはいえず、すでに指摘されているように(井上秀雄 1961; 662)、「三国史記編者はこの地帯に新羅郡県の置かれない筈がない観念的に考え、この地方の地名で編纂時の州・郡・県・鎮を選んでここに付加したもの」であろう。

阿珍押県—云 窮嶽>安峽県>安峽県⁴⁾

「押」は「嶽」と対応し、「峽」はこれと関連する漢語訳と考えられる。「押」は鴨緑以北の高句麗地名群で「嶽」と同義とされる「岳」を一樣にその漢語訳としてもっており、

居尸押>心岳城
骨尸押>朽岳城
皆尸押忽>牙岳城

また、別項の景德王による改正名の中でも、「押」は「岳」「嶽」に改名された例がみられる。

扶蘇岬⁵⁾>松岳郡
加火押>唐嶽県

したがって、これらの例からすれば、「押」の字に「岳～嶽」の意があったとしてよいと考えられようが、しかし、「押」を語尾にもつもので、その対応が

⁴⁾ 卷三七の列記地をもとにし、卷三十五にみえる統一新羅地名、さらに高麗時の改正名を「>」によって順次その変動を示した。

⁵⁾ 「岬」の字は新羅による用字とされる(前間恭作 1974; 326)。

はっきりしないのがある。

猪遼穴県一云 烏斯押>蒙猓県
 平淮押県一云 別史波衣>分津県
 屈於押一云 紅西>江陰県
 大楊官郡一云 馬斤押

まず、「押=穴」の場合は、冒頭に掲げた旧地名の「阿珍押県」が「安峽県」に改名されていることにより、「押=穴=峽」のような共通性が感ぜられ、古代日本語の「かひ」「あひ」と関係があるとされるものである(村山七郎 1962a; 7, 馬淵和夫 1973; 566)。ただし、これは、旧地名の改名の際、一字一語訳の原則があったとするならば、「穴」が別項で(穴城本甲忽、穴口郡一云 甲比古次)「甲~甲比」と対応しているから、「押」の音をもって「穴」のよみにあてたことになる。つぎに、「平淮押県」は「別史波衣」の別名となっている。これは、後述のように「波衣」が「峴」「巖」と対応する地名語尾であるから、旧地名の「平淮押」とその別名の「別史波衣」とは意味的に関連づけられないものとしてよいであろう。さらに、あとの二例も「押」は別名あるいは旧地名との関係がはっきりしないものである。このようにみて来ると、やはりさきの鴨緑江北地名にみえる「押=岳」の対応を重視すべきであろう。

伊珍賈県>伊川県>伊川県

高句麗地名表記におおくみられる「賈」の字は「川」「水」「井」と三様に対応している。

① 「賈」と「川」とが対応する場合

南川県一云 南賈、述川県一云 省知賈、内乙賈県>沙川県
 横川県一云 於斯賈、深川県一云 伏斯賈、狴川県一云 也尸賈

② 「賈」と「水」とが対応する場合

水入県一云 賈伊県、賈忽一云 水城、
 水谷城県一云 賈旦忽

③ 「賈」と「井」とが対応する場合

泉井口県一云 於乙賈串
 泉井郡一云 於乙賈

①と②の場合を考えあわせてみると、「賈」はその位置によって、語頭では「水」、語尾では「川」となってそれぞれ区別して改名されていることがわかる。このような改名は、高句麗語で「賈」に「水」および「川」という同源の

意味があったとも考えられようが、新羅地名にみえる「薩買⁶⁾」が高句麗本紀⁷⁾で「薩水」とあらわれることから推量すれば、「買」は「水」と対応するようである。とすると、③の場合、「買」が「井」に改名されたのは「於乙買」(泉井)という熟語と関連して意識したことになるであろう。

烏斯含達県>兎山郡>兎山郡

改名が旧地名の意をとったとすれば、「烏斯含=兎」「達=山」の対応が考えられる。まず、「達」に「山」の意があったとされるのは(李基文 1961; 34、村山七郎 1962a; 8)、「達」が高句麗地名語尾に多くみられており、それらは一貫して「山」と改名されているから、問題はないとみてよいであろう。もっとも、「達忽>高城郡」「高木根県—云達乙斯」のように「達」が「高」となっているものがあるが、これは「達=山」を意識したもので、本来「達」は「山」を表わしていると考えられよう。

つぎに、「烏斯含=兎」の対応については日本語の「ウサギ」と関係があるとされるものである(李基文 1961; 35、村山七郎 1962, a; 7)。ただし、この場合は、「兎山」が景德王による改正名であるため、下記のような例より「烏斯(烏生)=猪」の関係が一次的な重要性をもつとすれば、「烏斯含」はそれ自体一語として単独に用いられたものか、「烏斯+含」のように複合して用いられたものか、という問題が残されているといえよう。

猪遼穴県—云 烏斯押>豢豸県
猪足県—云 烏斯回>豨蹄県
猪蘭峴県—云 烏生波衣>豨嶺県

猪遼穴県—云 烏斯押>豢豸県>雲巖県

「烏斯」は「猪」と対応するものと考えられる(村山七郎 1962, a; 8、李基文 1967; 82)。ところが、梁柱東氏(1965; 644)によれば、「烏斯」の「烏」は「鳥」の誤りとされている。とすると、「鳥」は中古音で「tieu」と推定されている音であるから、「烏斯」は中世韓国語の「𪛗 tos」(猪)と関係があるとみているようである。

一方、「押」は既述のように「岳~嶽」と対応する地名語尾であると考へら

⁶⁾ 清川県本薩買県(卷三四地理一、尚州)、この地名は高句麗地名の下限と考えられるところに位置している。

⁷⁾ 秋七月、我軍與新羅人戰於薩水之原(卷三九高句麗本紀文咨王三年)

れるが、ここでは、「押」が「穴」と対応することになっている。「押」にある程度「穴」の意味もあったものか、あるいは、別項で「甲～甲比」を「穴」のよみにあてているから（穴城本甲忽、穴口郡一云 甲比古次）、ただ「押」で「穴」を「甲」とよませたものか、明らかにしえないが、「忽」・「達」・「買」などで知られるように語の意味の側面のつよい地名表記のことからして、むしろ異例のことといえよう。

猪闌岨県一云 烏生波衣一云 猪守>猪嶺県

前述の「烏生」を「猪」としてのぞけば、「波衣=岨」の対応が考えられる。高句麗地名の中では、「波衣」を語尾にもつものが多くみられ、中には、「波兮」または「巴衣」と表記されているものもある。この三種の表記を語尾にもつものをあつめてみればつぎのようになる。

「波衣」

夫斯波衣県一云 仇史岨>松岨県

平珍岨県一云 平珍波衣>偏嶮県

鶻鷁県一云 租波衣一云 鶻巖郡>鶻岳郡

「波兮」

三岨県一云 密波兮>三嶺県

文岨県一云 斤尸波兮>文登県

「巴衣」

済次巴衣県>孔巖県

その他

平淮(唯)押県一云 別史波衣>分津県

童子忽県一云 仇斯波衣>童城県

まず、この三種の表記を地域的な相違とするならば、ただ一例の「巴衣」は別として、「波衣」を語尾にもつものは漢山・牛首・何瑟羅の三州の北部に散在して位置しており、「波衣」の二地名だけが牛首州の中央部にかたよっているから、地域的な特色が感ぜられる。このような地域的な特色はあるいは方言の差によるものではないかとも推量せられるが、表記法の粗雑性を考慮されなければならないようである。

つぎに、この三種の表記の漢語訳をみると、「波衣(波兮)=岨」の対応はまづうごかないであろうが(新村出 1927; 18)、ほかに「波衣」と「巴衣」が一例ずつ「巖」と対応している。「巴衣」が「巖」に漢語訳されたのが、「岨」と

漢語訳された時期よりおくれて景德王による改名際であったことと⁸⁾、中世韓国語にみえる「바회 pahaoi」(巖)は「巴衣」とその音相のちかいということとを考えあわせると、「岨」と漢語訳された時期と「巖」と漢語訳された時期との間で、時代的なへだたりがあったことを感じさせる。

猪足県—云 烏斯廻>狔蹄県>麟蹄県

「烏斯=猪」については既述。とすると「廻=足」という関係がなりたつが、この対応は、訓の互転によるものとみる説がある(梁柱東 1965; 142, 辛允鉉 1958, 64)。すなわち、これは、中世韓国語における「脚」と「廻」の訓みが類似していることによるものであるが、

脚	다리	tari	(類合上 21)
廻	돌-	tor-	(類合上 3)

しかし、この場合、旧地名の「烏斯廻」を音訓の混用による表記とみななければならなくなつて、その真偽が問題になる。高句麗地名表記に限っていえば、このような混合表記はむしろ異例と考えられるからである(李基文 1968; 118)。「廻=足」の対応は、やはり「廻」という音に「足」の意があったとみるべきであろう(村山七郎 1962, a; 8)。

泉井郡—云 於乙買>井泉郡>湧州

「買=井」については、既述のように、「買」には「水」の意があるから、おそらく「井」は意識されたものであろう。さらに、「於乙=泉」の対応も考えられる。この対応は、高句麗人の「泉蓋蘇文」にみえる「泉」が『日本書紀』で「伊梨」と記録されたことにより、その証とされているが、

去年秋九月 大臣伊梨柯須弥殺大王(日本書紀卷廿四皇極天皇元年)
一方、『日本書紀』にみえる「伊梨」は、「於乙」における「乙」の舌内入声がすでに「己(l~r)」であった証拠としてあげられている(李基文 1968, 123)。

泉井口県—云 於乙買串>交河郡>交河郡

前述の「於乙=泉」と「買=井」をのぞけば、「串=口」の対応がえられるが、高句麗地名では「口」を表わすものとして、「串」のほかに「古次」また

⁸⁾ なお、「鵽鶻県—云 程波衣—云 鵽鶻郡」においては、その記述法からして「鵽鶻郡」は「鵽鶻県」よりあとに改名されたものか、この例だけでは明確にすることができないが、景德王による改正名には「巖」と同義の「岳」があらわれる。

は「忽次」という表記もあらわれる。

穴口郡 一云 甲比古次

楊口郡 一云 要隱忽次

獐項口県 一云 古斯也忽次

これらから、「串＝古次＝忽次」という等式ができようが、「串」の場合は「𪛗 koc」という訓を表わしているようである。

登山串 동산곶 tungsan koc (龍飛御天歌卷三十一)

暗林串 암림곶 'amrim koc (龍飛御天歌卷三十六)

とすると、「串」に「口」のよみ(古次～忽次)をあてるべきであろうが、しかし、「串」の字を訓読することによって、中世韓国語と奇妙に一致することは、むしろ高句麗地名資料としての真偽が疑われるとされている(李基文 1968; 118)。

横川県 一云 於斯買>横川県>横川県

「買＝川」については既述。すると、「於斯＝横」の対応が考えられるが、「於斯」は中期韓国語の「알 'as」(横)と一致するとされている(村山七郎 1963; 71、李基文 1967; 86)。

於斯内県 一云 斧壤>広平県>平康県

「於斯＝斧」および「内＝壤」の対応がそれぞれ考えられる。まず、「内＝壤」についてみると、「内」を語尾にもつものはほかに「奴」「惱」という用字でもあらわれ、それらはいずれも「壤」と対応している。この三種の用字を語尾にもつものをあつめてみるとつぎのようになる。

「内」

仍斤内郡>槐壤郡

今勿内郡 一云 万弩 (卷三五地理四)

骨衣内県 (卷三七地理四)

「奴」

仍伐奴県>穀壤県

今勿奴郡>黒壤郡 (卷三五地理二)

骨衣奴県>荒壤県 (卷三五地理二)

「惱」

休壤郡 一云 金惱

まず、この三種の用字を検討してみると、「内」と「奴」は『三国史記』卷三五及び卷三七の間で同様の用字を用いるのもあれば(仍斤内郡、仍伐奴県)、

またそれぞれ異なる用字を用いるのもあって(今勿奴郡～今勿内郡、骨衣奴県～骨衣内県)、両者の混用がみられる。また、地域的にみても、「内」と「奴」は相互に混在して位置しているから、両者を地域的に分けるのはむずかしいといえよう。しかし、ただ一例の「惱」は「内」および「奴」とはなれた何瑟羅州の北端に位置しているから、地域的なものと考えられなくもない。いずれにしても、この三種の用字に「壤」の意があったとされるのはみとめられようが、これらは南方トゥングース諸語の「na」(土地)、古代日本語の「ナ」、さらに新羅語で世を意味する「内」(赫居世或作弗矩内)、中世韓国語の「누리 nuri」(世)および「나라 narah」(国)と関係があるとされている(河野六郎 1957; 80、李基文 1967; 79)。

一方、「於斯」も「斧」と対応するとされている(村山七郎 1962b; 68、李基文 1967; 83)。

於支呑一云 翼谷>翼谷県>翊谿県

まず、「呑」は「谷」と対応すると考えられる。「呑」は高句麗地名の中でほかに「旦」「頓」とも表記され、この三種の表記は同じく「谷」を表わしている。

「呑」

康谷県一云 首乙呑

習比谷一作呑

「旦」

水谷城県一云 買旦忽

「頓」

十谷県一云 徳頓忽

これらより、この三種の表記は音韻の類似による異字表記といえようが、これは日本語の「タニ」(谷)と関係があるとされている(新村出 1927; 21)。

一方、「於支」も「翼」と対応するとされている(村山七郎 1963; 69、李基文 1967; 82)。

加支達県>菁山県>汶山県

「達=山」については既述。さらに「加支=菁」の対応が考えられようが、「菁」は日本の「かぶら」「大根」の類と関係があるのではないかと推定されている(馬淵和夫 1973; 564)。

王岐県 一云 皆次丁 > 馳道県 > 瑞禾県

「皆」と「王」の対応が考えられる。さらに例をあげれば、

王逢県 一云 皆伯

が加えられるが、「皆」は夫余官名の「加」、蒙古語の「qaran, qan」(帝王)、新羅官名の「幹・干」と関係があるとされている(李基文 1967; 83)。

王逢県 一云 皆伯 > 遇王県 > 幸州

前述の「皆」を「王」としてのぞけば、「伯=逢」と関係づけられるが、「伯」はエヴェンキ語の「baka-」(発見)、ラムート語の「bak-」(発見)、満州語の「baha-」(得)と一致するとされている(李基文 1967; 86)。

今勿内郡 一云 万弩 > 黒壤郡 > 鎮州

「内=壤」については既述。さらに「今勿=黒」の対応が考えられるが、「今勿」は中世韓国語の「검一 kəm-」(黒)と一致するとされている(李基文 1967; 85)。

牛岑郡 一云 牛嶺 一云 首知衣 > 牛峯郡

「首=牛」および「知衣=嶺」の対応がそれぞれ考えられる。まず、「首牛」の例をさらにあげれば、

牛首州 一云 首次若

が加えられるが、ここで、「首」は中世韓国語の「소 syo」(牛)と一致するとされている(李基文 1961; 35)。

一方、「知衣=嶺」の対応は中世韓国語の「재 cai」(嶺)と関係があるとされるものである(辛旼鉉 1958; 54)。

牛岷 쇼재 syocai (龍飛御天歌一卷三一)

休壤郡 一云 金惱 > 金壤郡 > 金壤郡

「惱=壤」については既述。さらに「金=休」の対応が考えられようが、これは訓で互転しているとされている(梁柱東 1965; 386)。

憩 일- sui- (類合下 21)

金 쇠 soi (訓蒙子会 31)

ただし、ここでも、「金惱」における音・訓の混用が問題になるようである。

童子忽県 —云 仇斯波衣>童城県>童城県

「忽」と「波衣」は既述のように「城」と「峴」の意をもつ地名語尾として知られている。したがって、旧地名と別名との関係が意味的に対応するか、問題になるものと考えられるが、一方、「仇斯」に「童」の意があったとし、日本語の「子」と関係があるとする説がある(李基文 1967; 83)。

功木達県 —云 熊門山>功城県>獐州

「達=山」については既述、さらに、「功木=熊」の対応が考えられる。これは中世韓国語の「곰 kom」(熊)、日本語の「くま」(熊)と関係があるとされている(李基文 1961; 37、村山七郎 1962, a; 8)。

楊根県 —云 去斯斬>浜陽県>楊平県

「斬=根」の対応が考えられる。さらにその例を加えれば、

高木根県 —云 達乙斬

があるが、「斬」はギリヤーク語の「tjamr」(根株)と関係があるとされている(李基文 1968; 137)。

穴口郡 —云 甲比古次>海口郡>江華県

「甲比=穴」および「古次=口」の対応が考えられる。まず、「甲比=穴」については、鴨緑以北高句麗地名にみえる「穴城本甲忽」の例をその証として加えられる。また別項で、

安峽県 本高句麗阿珍押県

とあるのは、「甲~甲比」が「押」とあらわれたことにより、既述のように「穴」と「峽」との間で、意味上の共通性が推量せられるが、これはトルコ語の「qapča」(峽谷)、日本語の「かひ、あひ」と関係があるとされている(村山七郎 1962a; 7、馬淵和夫 1973; 566)。

一方、「古次=口」の対応は、既述のように「古次」がほかに「忽次」および「串」という表記であらわれるものである。ここで、「古次」と「忽次」との違いは方言の差異を表わすのではないかと推定されている(李基文 1968; 118)。

五谷郡—云弓次云忽>五関郡>洞州

「弓次云忽」は『高麗史』『地理志』『東国輿地勝覧』などにみえる「于次吞忽」の誤りとされる(新村出 1927; 19)。とすると、「吞」「忽」は既述のように「谷」「城」を表わす語であるから、さらにわけて、「于次=五」の対応がえられる。ここで、「于次」は、日本語の「イツ」とその音相が類似していることにより、別項の高句麗地名にみえる「密=三」「難隱=七」「徳=十」などの数詞とともに日本語の数字との関連性が注目された(新村出 1927)。

獐塞県—云古所於>獐塞県>遂安県

「古=獐」の対応が考えられる。さらにこれと関連する例を加えれば、
獐項口県—云古斯也古次
がある。これらより、改正名の「獐」は「麋」と同字で小鹿の意であるということ、「古」は日本語の「カ」にあたるのではないかと推定されている(馬淵和夫 1973; 566)。

骨衣内県>荒壤県>豊壤県

「内=壤」については既述。さらに「骨衣=荒」の対応が考えられるが、「骨衣」は新羅語の「居柒」(荒)、中世韓国語の「거칠—kəcj(r)-」(荒)と類似するとされている(李基文 1967; 86)。

沙伏忽>赤城県>陽城県

まず、「忽」に「城」の意があったとされるのは(村山七郎 1962a; 3)、「忽」が高句麗地名語尾に多くみられており、それらが一貫して「城」と改名されていることにより十分考えられよう。『三国志』魏志東夷伝に「溝婁者句麗名城也」とあるのも、その証としてあげられている。一方、「沙伏=赤」の対応については、別項にみえる

赤木県—云沙非斤乙

のような例からも推定せられるが、これらより、「沙伏」「沙非」は古代日本語の「そほふね」の「そほ」と関係があるとされている(馬淵和夫 1973; 570)。また百濟地名にみえる「所非」もこれと関連するものといえよう。

赤鳥県 本百濟所非浦県 (卷三六地理三)

三峴県—云 密波兮>三嶺県>方山県

「波兮=峴」については既述、さらに、「密=三」の対応が考えられるが、「密」は日本語の「ミ」と関係があるとされている(新村出 1927; 19)。

遼城郡—云 加阿忽>守城郡>杆城郡

「忽=城」については既述、さらに、「加阿」は「遼」と対応し、中世韓国語の「ㄱ kAs」(辺)、ナナイ語の「kara」(辺)と類似するとされている(李基文 1967; 81)。

述余忽県—云 首泥忽>峯城県>峯城県

「述余(首泥)」は「峯」と対応し、中世韓国語の「수 snirk」(嶺)と一致するとされている(李基文 1961; 35)。また、百濟地名にみえる「述」もこれと関係づけられよう。

陰峯県—云 陰岑 本百濟牙述県 (卷三六地理三)

七重県—云 難隱別>重城県>積城県

「難隱=七」および「別=重」の対応がそれぞれ考えられる。まず、「難隱=七」については、「七」を表わす日本語の「ナナ」、ツングース語の「nadan」と関係があるとされている(新村出 1927; 20、李基文 1961; 35)。

つぎに、「別=重」の対応は中世韓国語の「ㄹ par」(重)、古代日本語の「へ」(重)と関係があるとされている(新村出 1927; 20、李基文 1967; 84)。

十谷城県—云 徳頓忽>鎮湍県>谷州

既述の「頓」「忽」を「谷」「城」としてのぞけば、「徳=十」の対応が考えられる。これも、既述の「三」「五」「七」の数詞とともに日本語の数詞と関連して日本語の「トウ」と関係があるとされるものである(新村出 1927; 21)。

僧山県—云 所勿達>童山県>烈山県

「所勿」は「僧」と対応するとされている(村山七郎 1962b; 69)。

今達—云 薪達—云 息達>土山県>土山県

「息」は「土」と対応するとされ、下記のような語と関係があるとされてい

る(李基文 1967; 78~79)。

ナナイ語 siru (砂)

エヴェンキ語 sɪrugɪ (砂)

蒙古語 širurai (塵・土)

中世韓国語 窩 hark (土)

主夫吐郡>長堤郡>樹州

高句麗地名には「吐」字であられる一群の語がある。

奈吐郡 一云 大堤

奈隄郡 本高句麗奈吐郡

隄上県 本高句麗吐上県

棟隄県 本高句麗東吐県

これらより、「吐=隄」の対応が考えられるが、「吐」は日本語の「ながて」「なはて」「どて」の「て」との関係が推定されている(馬淵和夫 1973; 568)。

済次巴衣県>孔巖県>孔巖県

「巴衣=巖」については既述。さらに、「済次」は「孔」と対応するとされている(村山七郎 1962 b; 67、李基文 1967; 80)。

内米忽郡 一云 池城 一云 長池>瀑池郡>海州

「内米」は日本語の「ナミ」(波)、ツングース語の「namu」(海)と比較されている(村山七郎 1962a; 7、李基文 1967; 80)、別項では、

内乙買 一云 内余米

沙川県 本高句麗内乙買県

の例があるので、「米」はただ「買」の音が変化したものとも考えられる(馬淵和夫 1973; 560)。

仍伐奴県>穀壤県>黔州

「仍伐」は「穀」と対応し、慶尚道方言の「나부래기 napuregi」(穀)と比較されている(村山七郎 1963; 196)。

仍忽県>陰城県>陰城県

「仍」は「陰」と対応するとされている(村山七郎 1962b; 67)。

仍斤内郡>槐壤郡>槐州

「仍斤」は「槐」と対応するとされている(李基文 1967; 81)。

長淺城県一云耶耶一云夜牙>長湍県>長湍県

「耶耶」は「淺」と対応し、中世韓国語の「 $\text{y\ddot{e}}$ yas-」(浅)と関係があるとされている(村山七郎 1962a; 10)。

鉄田郡一云毛乙冬非>鉄城郡>東州

「冬非」は、高句麗地名にみられるトルコ的要素の一つとして、トルコ語の「*tāmir*」(鉄)と関係があるとされているが(村山七郎 1962a; 11)、一方では、韓国語の「 $\text{t\ddot{u}ng}$ 」(円)との類似も指摘されている(李基文 1967; 86)。

冬忽一云于冬於忽>取城郡>洞州

「冬」は「取」と対応するとされている(村山七郎 1962b; 69)。

栗木郡一云冬斯脢>栗津郡>菓州

まず「冬斯」は「栗」と対応し、日本語の「とち」との関係が考えられるとされている(馬淵和夫 567)。なお、「脢」は「木」と対応し、日本語の「キ」と関係があるとされている(村山七郎 1962a; 8)。ただし、別項では「乙」が「木」にあたりと考えられる例があるが、

高木根県 一云達乙斯

赤木県 一云沙非斤乙

ここで、「乙」は、高句麗地名にみられるトルコ語的要素の一つとして、トルコ語の「*i* (森)~*īrač* (木)」と関係があるとされている(村山七郎 1962a; 11)。

冬𠂔(一作音)忽郡一云鼓監城>海阜郡>鹽州

「冬𠂔」は「鹽」と対応するとされている(村山七郎 1962b; 68)。

奈兮忽>白城郡>安城郡

「奈兮」は「白」と対応するとされている(村山七郎 1962b; 68、李基文 1967; 85)。

第三章 音 韻 組 織

上記のような考察に基いて、地名をその資料とし高句麗語に於ける音韻組織の推定を試みようとする。このために次のような方法を適用することが可能ではないかと考える⁹⁾。

1. 高句麗地名を表記するのに用いられている用字を、中国音韻史学によって再構された古代漢字音をあてはめることによって 音声記号化する（ここでは董同龢氏の『上古音韻表稿』を使用する）。ただし用字中、表意字として使用された可能性のある漢字（「珍、串¹⁰⁾」など）は考察の対象からはずす。この場合、高句麗という国家の存在した時期（BC 1 世紀中頃から AD 7 世紀中頃）から、上古音（漢代音）を用いるべきかそれとも中古音（隋唐音）を用いるべきかという問題が生ずるが、実際に調べた結果、上古音よりは中古音に近いことがわかった。しかしなかには上古音を参考にした方が良い場合もあるので、ここではその両方を出して検討することにする。

2. 音声記号化した漢字を母音、子音別に音の種類によって分類し、その使用頻度を調べる。使用頻度の高い音には、それと対応するひとつの音韻が高句麗語に存在していた蓋然性が大きい、逆に使用頻度の低い音はそれと音声的に類似した音韻の異音として吸収されてしまう蓋然性が大きい。

3. 音韻分析の資料とする高句麗地名には 同一地名に対する異表記（例「述尔忽県—云首泥忽」）、あるいは同一語彙に対する異表記（例「買一米」「水」；「波衣—波兮」「峴」）という形で音の対応例（あるいは音相通例と呼ぶ）がでてくる。このような音の対応例は音韻を立てたり異音の関係を推定したりする上で大きな示唆を与えてくれる。地名だけでなく高句麗の人名のなかにも異表記されたものがあるので（例、「孺留—類利」）、これらも適宜利用する。

4. 李基文氏(1968)は高句麗に於る漢字音について「高句麗における漢字音

⁹⁾ これを書くにあたり、馬淵和夫教授の「古代日本語と朝鮮語の音韻組織」(1975)と「古代朝鮮語と日本語の音韻組織の対比について」(未発表)を全面的に参考にさせていただいた。したがって方法に関してもこれらの論文に負うところが大きい。

¹⁰⁾ 「珍」は百済に於ても（「馬突県—云馬珍」三史 37-9）新羅に於ても（『日本書紀』で新羅の官名「波珍漢」を「波珍干岐」と表記し、「ハトリカムキ」と読む）*tor と訓読されている。したがって高句麗に於ても訓読された可能性がある。「串」は「泉井口郡—云於乙買串」という地名から「口」との対応が考えられ、* [koc] と訓読されたらしい（「龍飛御天歌」参照）。

は新羅におけるそれとほぼ似たものと推定される。…いとも素朴に、われわれは三国の先進であり中国と地理的に近かった高句麗をへて、新羅が漢字を受け入れた蓋然性を考えることができる…」と述べているが、氏の見解は妥当性のあるものだと考えられる。新羅に於ける漢字音はまだ全面的には明らかにされていないが、一部の漢字に関しては李基文氏 (1974a)、河野六郎氏 (1968) 等による言及がある (例、[na]—乃・奈・那 [ra]—羅・良 [ta]—多 [ki]—己・只 [mi]—美 [ri]—利・理・里 [ku]—古 [mu]—毛 [nu]—奴 [ru]—老 [su]—所 [tu]—刀・道 [al]—闕 [kan]—干 [han]—翰 [pal]—発 [tal]—達 [mil]—密 [ka]—加・可 [kã]—居・去 [r]—尸 [a]—阿 [i]—伊…。)。これらの漢字音から他の漢字の音を類推することも可能であるし、また新羅に於て語末の [-t] が流音化していた事実は、高句麗に於ても同様の可能性があったことを示唆してくれる。

5. 朝鮮語の母音体系には過去のある時期に大きな変動があったことが知られているが、その内容はおおよそ次のようなものである (河野六郎 1968、李基文 1974a、大江孝男 1978)。

*ü → u	*u → o
*ö → w	*o → ɐ
*ä → ə	*a → a

すなわち、現代朝鮮語に於て [u] は後舌円唇の高母音であるが (『世界言語概説』1955)、母音体系に変動が起るまえは中舌よりの [ü] であったという。同様に [o] は [u]、[w] は [ö]、[a] は [o]、[ə] は [ä] であったとされている。これは逆に現代朝鮮漢字音を知ることによって、過去の朝鮮漢音 (河野六郎氏 1968 によれば、8世紀末の慧林音義反切の示す唐代長安音の体系と符号するという) の推定が可能であることを示すものである。前項(4)にみたごとく、高句麗の漢字音が新羅のそれと似たものであったとすれば、このようにして過去の朝鮮漢字音を推定することは、高句麗の漢字音を知るうえで有意義である。

6. 高句麗語に母音調和がみられたかどうかは調べてみないとわからないが、もし母音結合の上でなんらかの特色がみられれば、それを母音組織を考える際にひとつの手がかりとする。

以上、高句麗語の音韻組織を推定するうえで適用できると思われる方法をいくつか挙げてみたが、すでに遠い過去に滅亡してしまった言語である上に、残された言語資料が非常に乏しく、方法上にもいろいろな制約が加わってくるよ

うである。たとえばこの言語を通時的にみることは困難である。高句麗という国家の存在した約 700 年のあいだには数々の音韻変化の起ったことが予測されるが、それらを見放して言語を共時的にとらえなくてはならないとしたら、音韻組織を推定するにあたって当然不合理が生ずるであろう。また後世に於ける高句麗語の音韻状態を知ることができないため、それと比較対照して内的再構を試みることも不可能である。さらに、同系と考えられる濊、貊等の夫余系諸言語がなんの記録も残さずに滅亡してしまったため、それらと比較して考察することもできない。いきおい新羅語の系統をひく朝鮮語に頼りすぎてしまうのではないかという懸念があるが、以下にうえに述べたような方法を用いて、まず母音組織について考えてみたい。

1. 母音組織

高句麗地名にあらわれる用字を音声記号化し、さらに中心母音によって分類すれば次のようになる。

ed → äi ~ i (3)	皆 [ked] ₃
eg → äi ~ iě (14)	買 [meg] ₁₄
eng → äng ~ iäng (2)	生 [seng] ₁ 丁 [teng] ~ [tieng] ₁
ie → ie (2)	新 [sien] ₁ 薪 [sien] ₁
ieg →iei (5)	脰 [ɣieg] ~ [ngieg] ₁ 兮 [ɣieg] ₄
ier → iě (4)	尔 [ńier] ₃ 弥 [m̐ier] ₁
ieg → iě (23)	知 [t̐ieg] ₆ 斯 [s̐ieg] ₁₄ 支 [k̐ieg] ₂ 只 [k̐ieg] ₁
ied →iei (6)	西 [sied] ₁ 米 [mied] ₂ 泥 [nied] ₂ 齊 [dz̐ied] ~ [ts̐ied] ₁
ied → i (19)	利 [l̐ied] ₃ 比 [p̐ied] ~ [b̐ied] ₄ 次 [ts̐ied] ₉ 伊 [ied] ₃
ie → iä (3)	省 [sieng] ~ [seng] ₂ 菁 [tsieng] ₁
iě → i̐e (4)	平 [b̐ieng] ₄
ô → ɔ (4)	吞 [t̐ôn] ₃ 德 [t̐ôk] ₁
âg → âi (2)	乃 [n̐ôg] ₂
ô → ê (2)	南 [n̐ôm] ₁ 含 [ɣâm] ₁
wâ → uə (51)	忽 [m̐wât] ₅₀ 頓 [twân] ~ [tâk] ₁
wâd → uâi (8)	廻 [ɣwâd] ₁ 内 [nwâd] ~ [nwâb] ₇
uêr → uâ (1)	火 [xuêr] ₁
ə → ɐ ~ iə (1)	𠂇 [səm] ₁
æg → äi ~ i (3)	史 [sæg] ₃
iə → iə (10)	今 [k̐iəm] ₂ 習 [z̐iəp] ₁ 息 [siək] ₁ 仍 [ńiəng] ₃
	音 [iəm] ₂ 金 [k̐iəm] ₁

ja → jě (7)	乙 [jət] ₇
jæg → i (2)	子 [tsjæg] ₁ 里 [liæg] ₁
wə → uə (2)	骨 [kwət] ₂
wəd → wäi ~ wi (1)	淮 [ɣwəd] ₁
iwəd → wi (1)	唯 [diwəd] ₁
iwə → iwě (3)	村 [t'iwən] ₁ 述 d'iwət] ₁ 密 [miwət] ₁
iə → jə (7)	隱 [iən] ₂ 斤 [kiən] ₅
iəd → jěi (9)	衣 [iəd] ₉
wə → uə (1)	寸 [ts'wən] ₁
iwə → iwə (6)	屈 [kiwət] ~ [kiwət] ₁ 勿 [miwət] ₅
iwə → iu (2)	伏 [b'iwək] ₂
iwəd → iwěi (4)	非 [piwəd] ₄
a → a (16)	甲 [kap] ₂ 押 [ap] ₅ 加 [ka] ₆ 沙 [sa] ₃
a → ja (1)	朔 [sak] ₁
ag → iwo (3)	助 [dz'ag] ₁ 所 [sag] ₂
ja → ja (3)	若 [n'jak] ~ [n'jæg] ₁ 上 [z'iang] ₂
ja → jă (2)	折 [t'iat] ₁ 列 [liat] ₁
jag → iwo (10)	去 [k'jag] ₁ 居 [kiag] ₁ 於 [iag] ~ [âg] ₃
iwag → iu (7)	扶 [piwag] ~ [b'iwag] ₁ 干 [ɣiwag] ₂ 蕪 [miwag] ₁
	夫 [piwag] ~ [b'iwag] ₃
iwa → iwä (2)	別 [piwat] ~ [b'iwat] ₂
äg → a (2)	牙 [ngäg] ₂
jă → jə ~ jă (2)	昔 [s'jäk] ₁ 赤 [k'jäk] ₁
jăg → ja (9)	邪(耶) [giäg] ~ [ziäg] ₂ 夜 [diäg] ₁ 也 [diäg] ₅
	車 [k'jäg] ₁
wă → wə (1)	伯 [pwäk] ~ [mwäk] ₁
wăg → wa (5)	馬 [mwăg] ₃ 巴 [pwăg] ₂
iwă → iwə (1)	伐 [b'iwăt] ₁
e → e (2)	斯 [tsəm] ₂
jə → jă (1)	恥 [t'iep] ₁
jă → ie (1)	烈 [liät] ₁
iwă → iwä (1)	滅 [miwăt] ₁
â → â (27)	阿 [â] ₃ 安 [ân] ₁ 臘 [lâp] ₁ 難 [nân] ₁ 多 [tâ] ₁
	且 [tân] ₁ 達 [t'ât] ~ [d'ât] ₁₇ 甘 [kâm] ₂
âd → âi (4)	奈 [nâd] ₃ 害 [ɣâd] ₁
âg → uo (18)	烏 [âg] ₇ 奴 [nâg] ₂ 吐 [t'âg] ₄ 蘇 [sâg] ₁ 租 [tsâg] ~ [tsag] ₁ 古 [kâg] ₃
wâ → uâ (12)	波 [pwâ] ₁₁ 活 [kwât] ₁
û → u (3)	功 [kûng] ₁ 東 [tûng] ₁ 木 [mûk] ₁
ûg → əu (3)	頭 [d'ûg] ₃

iuŋ → iu (1)	主 [t̚iuŋ] ₁
iu → iwo (1)	松 [ziuŋ] ₁
uŋ → iu (1)	鄒 [tsuŋ] ₁
ô → uo (9)	冬 [tông] ₉
ioŋ → iəu (7)	仇 [g'ioŋ] ₂ 首 [xiöŋ] ₅
ôŋ → âu (3)	刀 [tôŋ] ₁ 惱 [nôŋ] ₁ 毛 [môŋ] ₁
ioŋ → iäu (4)	消 [sioŋ] ₁ 召 [dioŋ] ₂ 要 [ioŋ] ₁

使用度数の多い音は、それがひとつの高句麗語の音韻と対応している蓋然性の大きいことは先に述べたとおりであるが、上掲の音のなかから使用度数の多い母音として次のようなものをあげることができる。(便宜上、10回以上用例のある母音をあげた。)

1. eg → äi~ië (14)
2. ieg → ië (23)
3. ied → i (19)
4. wê → uə (51)
5. iə → iə (10)
6. a → a (16)
7. iag → iwo (10)
8. â → â (27)
9. âg → uo (18)
10. wâ → uâ (12)

まず2と3の母音をもつ用字は「知、斯、支、只」および「利、比、次、伊」などであるが、このうち「只」は新羅時代の用字法で [ki] を、また「利」は [ri] をあらわす用字として使用されていた。これらの用字は現代朝鮮漢字音で [i] という母音をもつが(但し、「次」は後述するように語末子音 [ts] を表す用字であったと考えられるので、考察の対象からはずす)、[i] は朝鮮語に起った母音体系の変動にはかかわらなかったとされており、古代語に於てもやはり [i] の音価をもっていたと推定される。これらの用字は高句麗語に於て使用度数が高く、また高句麗の漢字音は新羅のそれと似ていたと推測されるところから、高句麗にこれと対応する /i/ という音韻が存在していたと考えてよいであろう。1の [eg → äi~ië] は14例すべてが「水、川」などを意味する「買」の例である。「買」は「米」(中古音で miei) とも対応し(例「内乙買—云内尔米>沙川県」、これらの用字の中古音が2の [ieg → ië] の中古音とほぼ一致す

るので、/i/ の異音として分類されよう。この他にも [ie → ie]₂ [ieg → ie]₅ [ier → iě]₄ [ied → ie]₆ [iwäd → iwěi]₄ などが /i/ の異音として分類される。このうち [ier → iě] に属する「弥」は日本推古仮名で [mi] (ミの甲類) として使用され、一方 [iwäd → iwěi] に属する「非」はヒ乙類の表記字となっている。高句麗語にも /i/ と /i/ の2つの音韻を立てるべきか否か問題になるところであるが、仮に2つの音韻があったとした場合、その用例数の比率は 77 対 4 となり非常にアンバランスである。さらに /i/ の他の母音との結びつきに注目すると /i/ はどの母音とも共起する中性的な性格をもっていたことが明らかとなり、/i/ に古代日本語のごとく甲乙あったとは考え難い。

6 [a → a] と 8 [â → â] に属する用字はそれぞれ「甲、押、加、沙」「阿、安、臘、難、多、且、達、甘」などである。この2つの母音のあらわれる環境は前者が k—p, #—p, k—#, s—#, 後者が #—#, n—#, t—#, #—n, t—n, l—p であって、両者が同一の環境にあらわれることはない。これを中国古代漢字音の表に照らしてみれば、#—#, n—#, t—n, l—p の環境には [â] しかあらわれないことが明らかであるし(すなわち [a] [nap] [tan] [lap] のような音をもつ漢字は存在しない)、k—p, k—#, s—#, #—n, t—# など [â] [a] のいずれか一方を選択できる環境に於ては「甲」に対して「嗑」「沙」に対して「娑、磋」, 「安」に対して「安、案、晏」など、より複雑な漢字を表音字として選択しなくてはならないことがわかる。したがって [â] と [a] は音価の違いを表すというよりは、限定された中国の用字からのやむを得ない選択であったと考えられ、ひとつの音韻 /a/ を立てることとする。10 の母音 [wâ → ua] は 12 例中 11 例が「波」の例であるが、これは声母が唇音(この場合は [p]) であるために合口性を伴う母音として発音されたものであろう。ちなみに合口性を伴わない [pa] ないし [pâ] という音をもつ漢字は中国の漢字のなかに見当たらない。したがって [wâ → ua] も /a/ の中に分類されるであろう。この他に /a/ の異音と考えられるものには [äg → a]₂ [wä → we]₁ [wäg → wa]₅ [e → e]₂ などがある。

7 の母音 [iag → iwo] のなかには「去、居」等が含まれるが、これらの用字は新羅時代の用字法で [kä] をあらわしていたといわれている。現代朝鮮漢字音では [ə] で発音されるが [ə] は朝鮮語の母音体系に変動が起る以前は [ä] であったとされており、これは新羅時代の漢字音と一致するものである。高句麗に於る漢字音が新羅のそれときわめて近いものであったとすれば、これらの用字が高句麗に於ても [ä] という母音で発音されていた可能性が充分考えられ

るが、高句麗語にはこの他にも [ä] と発音されたと考えられる母音が少なくなく、
 [ia → ia]₈ [ia → iä]₂ [iä → iε → iä]₂ [iäg → ia]₉ [ie → iä]₃ [ië → iε]₄ [iε → iä]₁
 [iä → ie]₁ [iwa → iwä]₂ [iwä → iwe]₁ [iwä → iwä]₁ など合計 40 例ほど見出さ
 れる。したがって /ä/ を認めてもよいであろう。

9 の [äg → uo] に属する漢字には「烏・奴・吐・蘇・租・古」等があるが、
 この母音はそれだけで比較的用例数も多く (18 例)、他の母音から明確に識別さ
 れる母音なので、これに対応する音韻が存在していたと推定される。新羅時代
 の用字法では、これらの漢字は [u] で発音されていたというが (李基文 1974a;
 但し河野六郎 1968 では「古」は [ko] の音価をもつとされている)、高句麗語
 には“壊”を意味する語彙で

奴—惱 “壊” [中古音で uo—âu]

のような対応例があり、[u] よりはもう少し広い [o] のような母音ではなかつ
 たかと考えられる。よって /o/ を立てることにする。しかしながら、その音価
 に関しては調音点が比較的高い位置にあったことが予想されるのではないだろ
 うか。高句麗の人名のなかに「伯固 (固一作句)」(AD 88-179) という人物 (のち
 の新大王) が出てくるが、彼の人名は「伯固」および「伯句」とふた通りに表
 記されており、この時期 (AD 1-2 世紀) には「固」[kâg → uo] と「句」[kûg →
 ɣu; kiug → kiɥ] の音がかかなり接近していた可能性を示唆してくれる。/o/ の
 異音である [äg → uo] は通時的にみると [äg] から [o] を経て [uo] へとその
 調音点を変化させていったと考えられるが、この時期にはその音変化の過程を
 完全に終了し、さらに [u] 寄りの方向にむかっていたと推測されるのである。
 高句麗末期の人物「泉蓋蘇文」が『日本書記』に於て「伊梨柯須弥」と表記さ
 れているのも、この推測を裏付ける一例となるのではないだろうか。すなわち
 「蓋蘇文」が「柯須弥」と表記されている (「泉」と「伊梨」が対応することに
 ついては後述) のは、当時の日本人ないし書記担当の渡来人が「蘇」[中古音で
 suo] を「須」[中古音で siu] と聞きとったのではないかと考えられ、これもま
 た高句麗語の /o/ の位置が高かったことを示す好例だと考えられる。

4 の [wâ → uə] という母音は 51 例と例外的に使用度数が高いが、このうち
 50 例が高句麗語で“城”を意味する「忽」の用例である。これは地名を音韻
 分析の資料として取り上げたために生じた片寄りであって、実際に使用例の多
 い母音とみることはできないかもしれない。「忽」に関しては“口”を意味す
 る高句麗語で

忽次—古次 “口” [中古音で uə—uo]

の対応例があるので /o/ の異音の中に入れてよいであろう。/o/ の異音としては、この他に [wə → uə]₂ [wə → uə]₁ [ô → uo]₀ [ôg → âu]₃ などがあげられる。

次に 5 の母音 [iə → iə] をもつ漢字には「今、習、息、仍、音、金」などがあるが、これらはその大半が現代朝鮮漢字音で [ɯ] という母音をもって発音される。この音は朝鮮語の母音体系に変動が起る以前は [ö] という母音であったとされているが、5 の [iə → iə] は [ö] と解釈することができ、[ɯ] がかって [ö] と発音されていたことは、中国古代漢字音からも裏付けられるようである。この母音に関する音の対応例で、

冬音忽一冬𠂔 [中古音で iə—iə]

のような同一地名に対する異表記がみられるが、これは [iə] という母音が他の音韻の異音であったというより、それ自体で 1 個の音韻として意識されていた可能性の大きいことを示す例だと考えることができよう。したがって /ö/ という音韻を認めることにする。このなかには [ô → ə]₄ [ə → ɐ → iə]₁ [iə → iə]₇ などがその異音として分類されるであろう。

これまでのところ用例が 10 以上ある母音を検討し、/i/ /a/ /ä/ /o/ /ö/ の 5 つの音韻をたて、またその中に含まれる異音について考えてきたが、そのいずれにも分類されない母音で比較的用例の多いものに [iwag → iu]₇ (「扶、子、蕪、夫」)、[iög → iəu]₇ (「仇、首」)、[iwä → iwə]₀ (「屈、勿」) などがある。これらの母音をもつ漢字は、現代朝鮮漢字音に於て母音 [u] で発音されるという共通の特色をもつ。[u] は母音体系に変動が起る以前は中舌よりの [ü] であったとされているが、上記の母音の中古音 [iu] [iəu] [iwə] はいずれも [ü] と解釈されるべき音を示しているようである。したがって /ü/ という音韻を立ててもよいであろう。この母音の音価はその異音から後舌の直音というよりは、中舌寄りで若干拗音性を帯びたものではなかったかと推測される。[ü → u] の例も 3 例程見出されるが、これは /ü/ に対立する /u/ という音韻を立てるには余りにも用例が少ない。また [u] のあらわれる環境が —ng ないし —k であって、[ü] のあらわれる環境とは相補分布をなすし、[ü] は中舌寄りの音であるにもかかわらず、後舌の /o/ とも中舌の /ö/ とも自由に共起する中性的な性格をもっている。したがって /ü/ と /u/ の音韻的対立はなかったものと見なすことができ、両者をまとめてひとつの音韻 /u/ を立てるのが妥当であろう。

以上のように高句麗語の母音を検討した結果、その母音組織は /i/ /a/ /ä/

/o/ /ö/ /u/ の六母音から成るものであることが推定された。母音とその主な異音を整理してみると次のようになる。

/i/ [i^{eg} → i^ě]₂₃ [i^{ed} → i]₁₉ [e^g → äi ~ i^ě]₁₄
 /a/ [â → â]₂₇ [a → a]₁₆ [wâ → uâ]₁₂
 /ä/ [iag → iwo]₁₀
 /o/ [âg → uo]₁₈ [wâ → uə]₅₁ [ô → uo]₉
 /ö/ [iə → iə]₁₀ [i^ö → iə]₇
 /u/ [iög → i₂u]₇ [i^{wag} → iu]₇ [i^{wö} → i^{wə}]₆

次にうえに推定した母音組織をもとにして、高句麗語に母音調和があったかどうか、またあったとしたらどのようなものであったのか考えてみたい。まず音韻分析の資料として用いたそれぞれの高句麗地名を、さきに推定した母音体系にしたがって表記しなおし、あいとなりする母音の結びつきの状態を調べて表にしてみると次のようになる。但し、このばあい高句麗語に特徴的な地名語尾(「忽、達、買、内、奴、吐…」)のまえなど、明らかに語根の切れ目があると考えられるときは、語根毎に区切って同一語根内で観察することにした。

後項 前項	/i/	/u/	/o/	/ö/	/a/	/ä/
/i/	6	4	0	2	4	5
/u/	13	2	3	0	0	2
/o/	12	1	3	3 ₍₀₎	3	1
/ö/	2	1	0	1	1 ₍₀₎	2
/a/	21	4	2	2 ₍₁₎	4	0
/ä/	8	0	1	1	0	1

うえの表から /i/ と /u/ はどの母音とも共起するが、一方 /o/ と /a/ はそれだけでひとまとまりをなし、/ö/ と /ä/ もそれだけでひとまとまりをなす傾向のあることが観察される。すなわち /i/ /u/ は中性母音的性格をもつが、/o/ /a/ は後舌母音、/ö/ /ä/ は非後舌母音として、この言語には後舌対非後舌という母音結合の法則のようなものが存在していたのではないだろうか。

このような観点に立って、もう一度資料を見なおしていくと2,3の点に気付かされる。母音結合のうえで例外となる地名のなかに、「滅鳥」/mälo/「鳥列忽」/oläl-kol/「難隱別」/nanön-bäl/「冬音奈」/tonömna/「冬音忽」/tonöm-kol/「馬斤押」/makön-ap/「加知斤」/katikön/「沙非斤乙」/sabikön-il/ など

があるが、そのうちはじめの2例に共通しているのは「鳥」[o] という用字が用いられていることと、さらにそれが母音 [ä] と共起している点である。これは上代日本語の母音の甲乙の崩壊過程に於て、オ列ではまずホとオに甲乙の区別が失われたことを思い起こさせてくれる。そして高句麗語にもこれと似たような現象、たとえば子音と結合していない [o] にまず最初に [o]/[ö] の区別が失われたのではないかというような推測を可能にする。ちなみに3番目の「難隠別」も語頭子音のない非後舌の [ö] (「隠」の [ön]) が [a] と共起する例である。

4番目と5番目の例に関しては百濟地名の「冬音県>耽津県」が参考になるかもしれない。この地名は「冬音一耽」の音相通から「冬音」は [təm] と読まれたといわれているが、高句麗に於ても [tonöm] と2つの母音が発音されることはなくおそらく [tom] ないし [töm] と読まれていたのではないだろうか。これは新羅に於て「音」を語末子音 [m] をあらわすために用いた例(「夜音」[pam]) があるところからも想像できることがらである。もしそうだとすればこれは母音結合上の例外とはならない。最後の3つの例には共通して「斤」[kön] の用字が用いられているが、高句麗語に“赤”を表す語で

沙非斤 /sapikön/—沙伏 /sapuk/

の対応例があるところから、「斤」は [kön] ではなく単に [k] という語末子音を表すために用いられたのではないかと推測できるかもしれない。もしこの推測が正しければ「馬斤押」は /mak-ap/、「加知斤」は /katik/ となり、母音結合の上で不都合をもたらすことはなくなる。このような考察のもとに上表の数値を訂正すれば()内のようになり、後舌 /o/ /a/ 対非後舌 /ö/ /ä/ という母音調和の現象がいっそうはっきりと浮び上がってくるように思われる。

2. 子音組織

次に子音組織について考えてみることにする。まず音声記号化した高句麗語資料の用字を語頭子音、語中子音ごとに子音の種類によって分類し、その使用度数を示せば次のようになる。

<語頭子音>

[p]₉ 別 [piwat]~[b'iwat]₁ 扶 [piwag]~[b'iwag]₁ 波 [pwâ]₂ 非 [piwâd]₂ 比 [pied]~[b'ied]₁ 夫 [piwag]~[b'iwag]₂
 [b']₄ 伏 [b'iwâk]₁ 平 [b'iëng]₃
 [m]₁₈ 蕪 [miwag]₁ 馬 [mwag]₃ 滅 [miwät]₁ 買 [meg]₅ 弥 [mjer]₁
 密 [miwät]₁ 毛 [môg]₁

[t] ₁₀	多 [tâ] ₁ 德 [tâk] ₁ 刀 [tôg] ₁ 冬 [tông] ₆ 東 [tûng] ₁
[t'] ₄	吐 [t'âg] ₁ 達 [t'ât]~[d'ât] ₃
[n] ₉	奈 [nâd] ₂ 難 [nân] ₁ 泥 [nied] ₁ 南 [nâm] ₁ 乃 [nâg] ₂ 內 [nwâd]~[nwâb] ₂
[ts] ₃	菁 [tsjeng] ₁ 租 [tsâg]~[tsag] ₁ 齊 [tsied]~[dz'ied] ₁
[dz'] ₁	助 [dz'ag] ₁
[s] ₁₂	肖 [sjog] ₂ 新 [sien] ₁ 薪 [sien] ₁ 朔 [sak] ₁ 所 [sag] ₁ 昔 [sjäk] ₁ 沙 [sa] ₂ 省 [seng]~[sjeng] ₁ 史 [sæg] ₁ 息 [sjæk] ₁
[z] ₂	松 [ziung] ₁ 習 [ziəp] ₁
[t̥] ₂	主 [t̥iung] ₁ 折 [t̥iat] ₁
[d'] ₁	述 [d'iwət] ₁
[n̥] ₄	若 [n̥iak]~[n̥iäg] ₁ 仍 [n̥iəng] ₃
[z̥] ₁	上 [z̥iang] ₁
[k'] ₂	赤 [k'äk] ₁ 車 [k'äg]~[kiag] ₁
[k] ₂₅	骨 [kwət] ₂ 加 [ka] ₆ 居 [kiag] ₁ 甘 [kâm] ₂ 古 [kâg] ₃ 皆 [ked] ₃ 今 [kiəm] ₂ 金 [kiəm] ₁ 斤 [kiən] ₁ 屈 [kiwət]~[k'iwət] ₁ 功 [kûng] ₁
[k'] ₁	去 [k'ia] ₁
[g] ₁	耶(邪) [giäg]~[ziäg] ₁
[g'] ₂	仇 [g'iög] ₂
[x] ₄	首 [x'iög] ₄

<語中子音>

[p] ₂₁	比 [piəd] ₃ 波 [pwâ] ₉ 巴 [pwäg] ₃ 伯 [pwäg] ₁ 夫 [piwag] ₁ 別 [piwat] ₁ 非 [piwəd] ₃
[b'] ₃	平 [b'jeng] ₁ 伐 [b'iwät] ₁ 伏 [b'iwäk] ₁
[m] ₁₇	弥 [mier] ₁ 米 [mied] ₂ 買 [meg] ₉ 勿 [miwät] ₄ 木 [mûk] ₁
[m̥] ₃₃	忽 [m̥wət] ₃₃
[t] ₁₂	丁 [teng] ₁ 知 [tieg] ₆ 頓 [twân]~[tâk] ₁ 恥 [tiəp] ₁ 冬 [tông] ₂ 且 [tân] ₁
[t'] ₂₁	吞 [t'ên] ₃ 吐 [t'âg] ₃ 村 [t'iwən] ₁ 達 [t'ât]~[d'ât] ₁₄
[d] ₂	唯 [diwəd] ₁ 召 [diog] ₁
[d'] ₃	頭 [d'ûg] ₃
[n] ₉	泥 [nied] ₁ 內 [nwâd]~[nwâb] ₄ 奈 [nâd] ₁ 奴 [nâg] ₁ 惱 [nôg] ₁
[l] ₇	利 [liəd] ₃ 里 [liæg] ₁ 烈 [liät] ₁ 列 [liat] ₁ 臘 [lâp] ₁
[ts] ₄	子 [tsjæg] ₁ 斯 [tsəm] ₂ 鄒 [tsug] ₁
[ts'] ₁₀	次 [ts'ied] ₉ 寸 [ts'wən] ₁
[s] ₂₃	省 [seng]~[sjeng] ₁ 西 [sied] ₁ 斯 [sjeg] ₁₄ 生 [seng] ₁ 蘇 [sâg] ₁ 沙 [sa] ₁ 所 [sâg] ₁ 史 [sæg] ₂ 𠄎 [səm] ₁

[z] ₁	邪 [ziäg] ₁
[ń] ₃	尔 [ńier] ₃
[ž] ₁	上 [žiang] ₁
[k] ₃	支 [kieg] ₂ 只 [kieg] ₁
[k] ₆	古 [kâg] ₁ 活 [kwât] ₁ 斤 [kiön] ₄
[ng] ₂	牙 [ngäg] ₂
[ŷ] ₉	兮 [ŷieg] ₄ 廻 [ŷwâd] ₁ 淮 [ŷwäd] ₁ 害 [ŷäd] ₁ 盼 [ŷieg] ₁ ~ [ngieg] ₁ 含 [ŷâm] ₁
[x] ₁	火 [xûar] ₁

上の表から観察できることをいくつか記述してみたい。まず、語頭および語中に於て、無気音と有気音の対立はなかっただろうと考えられる。語頭と語中にあらわれる無気音と有気音の使用度数を比較すると次のようになる。

語頭	語中
[p] ₉ / [p'] ₀	[p] ₂₁ / [p'] ₀
[t] ₁₀ / [t'] ₄	[t] ₁₂ / [t'] ₂₁
[ts] ₃ / [ts'] ₀	[ts] ₄ / [ts'] ₁₀
[t̚] ₂ / [t̚'] ₀	[t̚] ₀ / [t̚'] ₀
[k'] ₀ / [k'] ₂	[k] ₃ / [k'] ₀
[k] ₂₅ / [k'] ₁	[k] ₆ / [k'] ₀

ここに挙げた 12 組の無気音・有気音の対のうち、有気音の用例がゼロのものが過半数を占めるが、これはこの言語に無気、有気の対立があったとするには少なすぎる数である。一見、語中に於る [t'] の用例が多いようにみうけられるが、これは「山」という意味をあらわす「達」の用例が 14 例あるからで、地名を言語資料として扱ったために生じた片寄りであろう。(さらに、「達」の音は [t'ât] ~ [d'ât] であり、後者の音とすれば「達」は [t] の有気音ではなくなる。)

無気・有気の対立が存在しなかった可能性を示すものとして、次のような音相通例を挙げることができる。

波害平史県一坡害平史県(『高麗史』) [p-p']

吞一旦頓 “谷” [t'-t-t]

このうち後者の例は「吞」(3例)がすべて牛首州の北部の地名に見出され、「旦」(1例)と「頓」(1例)が漢山州の北部に見出されるので、[t'] と [t] の音のちがいは方言的差異であったと指摘することも可能であろう。しかしながら州を異にするとはいえ、「吞、旦、頓」をもつ五つの地名は北緯 39 度の線上付近に集っており、地理的にはさほど隔っているわけではない。このように無気音と有

気音の間の対応例は存在するが、一方有気音相互の音相通例は一例も見出すことができない。ちなみに河野六郎氏(1968年)は、新羅時代の官名「海(ハトリ)干」が「波珍食」とも「破珍干」とも表記されているのに注目し、「波」[p]と「破」[p']の音相通から、古代朝鮮漢字音(この場合は新羅であるが)に、無気と有気の対立がなかった可能性を指摘している。

次に語頭と語中に於ける無声音、有声音の使用度数を比較してみる。

語頭	語中
[p] ₉ [p'] ₀ / [b'] ₄	[p] ₂₁ [p'] ₀ / [b'] ₃
[t] ₁₀ [t'] ₄ / [d'] ₀	[t] ₁₂ [t'] ₂₁ / [d'] ₃
[ts] ₃ [ts'] ₀ / [dz'] ₁	[ts] ₄ [ts'] ₁₀ / [dz'] ₀
[s] ₁₂ / [z] ₂	[s] ₂₃ / [z] ₁
[t̃] ₂ [t̃'] ₀ / [d̃'] ₁	
[š] ₀ / [ž] ₁	[š] ₀ / [ž] ₁
[k] ₀ [k'] ₂ / [g'] ₀	[k̂] ₃ [k'] ₀ / [ĝ'] ₀
[x] ₄ / [χ] ₀	
[k] ₂₅ [k'] ₁ / [g'] ₂	[k] ₆ [k'] ₀ / [g'] ₀
	[x] ₁ / [χ] ₉

この対比から、語頭、語中ともに無声子音(無気音、有気音を含む)の使用例が有声音のそれに比して圧倒的に多いことが明らかになる。ただ語中に於ける有声音[χ]の用例が多いのが気になるが、後述するように[χ₁...]のばあいには[χ]=ゼロとなるので、[χ]の子音としての用例は4例にすぎない。したがって、この両者の用例数の比は、高句麗語に無声音対有声音という音韻的対立があったとするにはアンバランスであることを示しているようである。この推測を助けるものとして次のような無声子音と有声音相互の音相通例を挙げることができる。

語頭 述尔忽(県)一苴泥忽(d̃'-x̃)

上忽一車忽(z̃-k̂)

朱蒙一鄒牟一仲牟(t̃-ts-d̃')¹¹⁾

語中 沙伏一沙非斤(b̃'-p)

新羅語の系統をひく朝鮮語には、古代、中期、現代に至るまで一貫して無声、有聲の対立のなかったことが指摘されているが(李基文 1974a)、この点に於て高句麗語は朝鮮語と一致する。しかしながら、朝鮮語にみられるように語頭に

¹¹⁾ 「朱蒙」は高句麗の始祖東明王の名前である、これが好太王碑文には「鄒牟」、『日本書紀』には「仲牟」と記されている。

は無声子音だけが用いられ、母音間には有声子音だけが用いられるというような相補分布が存在したかどうかは手元の資料から明らかにすることはできない。

次に濃音に関してであるが、濃音と平音の対立もおそらく存在しなかったであろう。この推測を裏付けるような音相通例としては、

若只頭恥(県)―若豆恥(県) [kk-k]

甲忽―甲比古次 “穴” [p-pp]

の二例がみい出される。「只」は新羅時代前用字法で [ki] を表すが、高句麗語にも新羅語と同じく「只」を [ki] と読む伝統があったとすれば、最初の例(同一地名に対する異表記)は [kk-k] の対応を示し、濃音と平音のあいだに音韻的対立がなかったことを示唆するものとなる。二番目の例は「穴城―云 甲忽」および「穴口郡―云 甲比古次」の二つの地名から“穴”という意味を表す高句麗語として「甲」、「甲比」の二通りの表記を得たものである。これを [p-pp] の対応と考えれば、初めの例と同じく濃音と平音の間に音韻的対立がなかったことを示すものとなるであろう。しかしながら、二つの地名のうち「甲忽」は鴨綠江以北の地名であり、「甲比古次」は漢山州中部にある「江華」の古名であるため、両者の音の差異を方言的なものであるとみる見方も可能であるし、一方、この差異を曲用形のちがいであるとする考え方もある(李基文 1968)。したがって、この例は濃音系列の存在について考える上で最も適した例であるとはいえないかもしれないが、いずれにしても高句麗語資料のなかに濃音の存在を示唆するような積極的な資料がないこと、また古代朝鮮語にも濃音系列は存在せず、濃音の語頭への進出は前期中世語の段階であったこと(李基文 1974a)などを考え合わせて、高句麗語にも恐らく存在しなかっただろうと推測されるのである。

次に鼻音にうつる。まず語頭および語中に於ける鼻音とその用例数は次の如くである。

語頭	語中
[m] ₁₃	[m] ₁₇
[ɱ] ₀	[ɱ] ₃₃
[n] ₉	[n] ₉
[ɳ] ₄	[ɳ] ₃
[ŋ] ₀	[ŋ] ₂

[m] は語頭、語中ともに用例数が多く、音声的にも他の鼻音とは明確に識別される音であるから、高句麗語の中に /m/ という音韻が存在していたと考えて

よいであろう。語中に於て [m] の用例が多いが (53 例)、これはすべて高句麗語で“城”を意味する「忽」という用字の上古音の例である。ところでこの「忽」という語彙は『三国志魏志東夷伝』に「溝婁」(「溝婁者句麗名城也」)ともあらわれ、また高句麗語で“口”を意味する語が「忽次」とも「古次」とも表記されているところから、上古音より中古音の [x] についた方が良いことが明らかである。したがって、鼻音の項からは除外することにする。

[n] も [m] と同じ理由により高句麗語の中にひとつの音韻として存在していたと考えられる。また同一地名に対する異表記として

述尔忽(県)―首泥忽 (ń-n)

のような音相通例があるので [ń] は /n/ の異音としてよいであろう。しかしながら、語頭に於ては高句麗の人名(同一人名に対する異表記)で

菓盧―若友 [ゼローń]

のように [ń]=ゼロの可能性を示す例がある(「菓」の声母 [g] は中古音でゼロとなる)。これは現代朝鮮漢字音に於て、中古音で声母 [n] をもつ漢字がすべて母音はじまりである(すなわち声母を落としている)こと、中期朝鮮語に於ても声母を落としている漢字の例がいくつかみられること(たとえば「熱」[ńiät] は 열 [yol]、「人」[nien] は 人 [in] ないし 人 [zin]) 等と関連があるのではないだろうか。朝鮮漢字音のなかに見られる特色が古く高句麗語のなかにも見出されるとすれば、李基文氏(1968)の高句麗に於る漢字音は新羅に於けるそれと似たものであったという推定がひとつの裏付けを得ることにもなる。

鼻音としては、ほかに [ng] があるが、これは発音されなかったであろう。河野六郎氏(1968)は新羅に仏教が入った当時の伝承にでてくる「阿道」和尚が「我道」(「我」は中古音で [ngâ]) とも記録されているところから、朝鮮漢字音に於て声母 [ng] が発音されない伝統は、遠く新羅時代にまで溯るものであることに言及しているが、これが高句麗語にも該当する現象であることは、次のような同一地名に対する異表記から知ることができる。

耶耶―夜牙(中古音で ɟa ɟa―ɟa nga)

「耶」は「邪」の異字であり、上古音では声母 [d] をもつが、[d] は中古音で [ゼロ] となるため「耶」と「牙」の対応は [ゼロ-ng] の対応ということになり、[ng] は発音されなかったと推定できる。これも高句麗の漢字音と新羅の漢字音がきわめて近いものであったことを示す好例であろう。

次に流音について考えてみたい。(高句麗語に於る流音を [r] と表記すべきか [l] と表記すべきか。あるいは現代朝鮮語にみられるように [r] と [l] が相補分

布をなすものかわからないが、ここでは董同龢氏の『上古音韻表稿』の表記にならって [l] と表記することにした)。[l] の用例は語中に於ては「利、里、烈、列、臘」など7例みられるが、語頭に於ては一例もみあたらない。後述するように高句麗の漢字音では韻尾の [-t] がすべて流音化していたと推定されるので、これを加えれば語中に於る [l] の用例はさらに多くなる。これは、語頭には [l] が立たないというアルタイ諸語全般(朝鮮語も含めて)にみられる特色を思いおこさせるのに充分である。高句麗の人名を表す用例で

類例一孺留 [l-ŋ]

という音相通例(同一人名に対する異表記)があるが、これは「類利」という人名が [l] で発音されず「孺留」の [ŋ] で発音されたことを示すものだと考えられる。([ŋ] が /n/ の異音となることはすでに述べた)。中国漢字音で声母 [l] をもつ漢字は、現代朝鮮漢字音で声母 [n] がないし[ゼロ] (すなわち母音はじまり)で発音されるが、この [l] が [n] に置き換えられる伝統は、すでに中期朝鮮語に於て知られている。(例「老母」は [nomo]、「李小児」は [nisyozA] と発音されたという(李基文 1974a))。この例はその伝統がさらに古い時代にまで溯るものであることを示唆しているといえよう。

次に語頭および語中に表われる子音のなかですでに言及した鼻音、流音以外のもの、すなわち破裂音、摩擦音について考えてみたい。このうち [d] と [g] は中古音ではゼロとなるので子音のなかから除外することにする。すでに無気 / 有気の対立、無声 / 有声の対立、濃音 / 平音の対立もなかったと推定されることについては概観したが、この点を考慮に入れて以上の音を整理すると、次のよう10なグループに分けることができる。

1. [p] [pʰ] [bʰ]
2. [t] [tʰ] [dʰ]
3. [ts] [tsʰ] [dzʰ]
4. [s] [z]
5. [t] [dʰ]
6. [ʃ]
7. [k̆] [kʰ]
8. [x]
9. [k] [kʰ] [gʰ]
10. [x] [ɣ]

このなかで5と7のグループに属する [t̆] [k̆] は中古音で [ts] に、[kʰ] は [tsʰ]

に、[dʒ] は [dz] に変っているが、上古音よりは中古音についた方が良いことはすでに言及した「耶耶一夜牙」「忽一溝淩」等の音相通例や、さらに同一人名の異表記である。

朱蒙—鄒牟 [上古音で t̪-ts 中古音で ts-ts]

からも知ることができる。5 と 7 の音は用例数もきわめて少く、独立した音韻とはみなしがたいので、まとめて 3 のグループに入れてよいであろう。

9 と 10 のグループ(軟口蓋の破裂音と摩擦音)のあいだには

忽一溝淩 “城” [x-k]

忽次—古次 “口” [x-k]

のような音相通例が見出されるので、両者は同じ音韻の異音となる可能性をもつ。このうち [ɣ] は『上古音韻表稿』によると、一、二等の母音があとにくる場合は [ɣ] 音をもつが、三・四等の母音があとに続く場合は、[j] にかかわるとされている。

波衣—波兮 “岨” [iəd-ɣieg]

の例は、それを裏付けるものであろう。高句麗地名の「栗木郡—云冬斯盼」から“木”を意味する語彙として「盼」を取り出し、しばしばこれが古代日本語の [ki] “木”と比較されてきたが(村山七郎 1962b; 李基文 1967)、「盼」は上古音で [ɣieg]、したがって中古音では [iei] となるはずの音であるから、これを直接古代日本語と比較するのはむずかしいのではないだろうか。

6 と 8 のグループはそれぞれ用例数が少く、かつ中古音に於て両者は一致するので ([x] は中古音で [ʃ] となる)、ひとひとまりをなすと考えることができる。これはさらに音声的に類似した 4 のグループに入れることができるであろう。

以上のような考察をもとにして、子音のグループを再編成すると次のようになる。

1. [p] [pʰ] [bʰ]
2. [t] [tʰ] [dʰ]
3. [ts] [tsʰ] [dzʰ] [t] [dʰ] [k] [kʰ]
4. [s] [z] [ʒ] [x]
5. [k] [kʰ] [gʰ] [x] [ɣ]

この五つのグループは、グループ毎に使用度数も高く、また音声的に互に他のグループから明確に識別される音であるので、そのまま五個の音韻と見なしてさしつかえないであろう。すなわち /p/ /t/ /ts/ /s/ /k/ の五つの子音を立てる

ことにする。

次に語末子音について考えてみたい。これについて考えることは、高句麗語の音節構造（朝鮮語のように閉音節を有するか、それとも日本語のように開音節であるか...）を知るうえで重要な意味をもつであろう。語末子音を考えるにあたり、一つの地名が二つ以上の語根に明確に分けられる場合は、分けて考察することにした（例えば、「仍斤一内」、「省知一買」、「沙伏一忽」など）。まず語末子音（但し、語末に使用されている漢字の韻尾音）を音の種類によって分類し、その使用度数を示すと次のようになる。

<語末子音>

[m] ₈	南 [nâm] ₁ 斯 [tsem] ₂ 音 [iəm] ₁ 含 [γəm] ₁ 𠂔 [səm] ₁ 今 [kjem] ₁ 金 [kjem] ₁
[n] ₁₁	薪 [sien] ₁ 隱 [iən] ₁ 寸 [ts'wân] ₁ 斤 [kiən] ₃ 吞 [t'ôn] ₁ 旦 [tân] ₁ 頓 [twên]~[tâk] ₁
[ŋ] ₉	冬 [tông] ₁ 東 [tûng] ₁ 菁 [tsjeng] ₁ 省 [seng]~[sieng] ₁ 仍 [níeng] ₁ 上 [zíang] ₂ 丁 [teng]~[tieng] ₁ 生 [seng] ₁
[p] ₁₀	押 [ap] ₇ 臘 [lap] ₁ 甲 [kap] ₁ 恥 [tjəp] ₁
[t] ₈₀	別 [piwat]~[b'iwat] ₁ 伐 [b'iwät] ₁ 密 [miwät] ₁ 達 [t'ât]~[d'ât] ₁₂ 忽 [m'wät] ₄₇ 勿 [miwät] ₄ 列 [liät] ₁ 烈 [liät] ₁ 活 [kwät] ₁ 乙 [iät] ₅ 骨 [kwät] ₄ 述 [d'iwät] ₁ 折 [tjät] ₁
[k] ₉	伯 [pwäk] ₁ 伏 [b'iwök] ₁ 徳 [tâk] ₄ 昔 [siäk] ₁ 息 [siäk] ₁ 木 [mûk] ₁

語末子音について考えていく場合、上代日本語に用いられた音仮名について思いめぐらすことによってひとつの示唆が与えられるのではないだろうか。すなわち上代日本語に於ては、開音節という音節構造の性格により、韻尾音をもった用字が単音節仮名として用いられることは少く、常に韻尾を意識した用法に制約され、特に末尾音節の表記には使用され難かったという（森山隆 1971）。この事実、末尾音節に韻尾音をもたない用字が使用されていれば、語末子音をもたなかった可能性が大きい、逆に韻尾音をもつ用字が使用されていれば語末子音をもっていた可能性の大きいことを示唆するものと考えてよいであろう。実際、高句麗語に於ける音相通例をみていくと、無韻尾の語は無韻尾の語と対応している例が多いのに気付く。

<地名>

述尔(忽)一首泥(忽)

内乙買一内尔米

耶耶一夜牙

加阿(忽)一加羅(忽)
 夫斯一夫蘇 “松”
 奴一内一悩 “壊”
 波衣一波兮 “巖；岨”

<人名>

伯固一伯句
 葉盧一若友

無韻尾のものと有韻尾のものが対応している例としては、次の二例が見出されるにすぎない。

<地名>

鳥斯一島生 “猪” [ゼローng]

<人名>

蓋蘇文一柯須弥 [nーゼロ]

このうち「蓋蘇文」は高句麗の人名として『三国史記』に記載されているが、「柯須弥」は同一人名を『日本書記』に記載したもので、この両者の表記上のちがいは記録した人の母国語の影響によるものと考えられることもできる。

まず語末子音 [m] について考えてみることにするが、その際同一地名に対する異表記

冬音(忽)一冬𠂔 [m-m]

が、手がかりを与えてくれる。「音」という用字は『郷歌』(新羅語資料)に於て「夜音」[pam] (意味は“夜”)と語末の [m] を表すのに用いられている。高句麗の漢字音が新羅のそれと比べて近かった可能性のあることは、すでにいくつかの証拠を通して概観してきたところであり、高句麗に於ても「音」の語末子音 [m] が発音されていた可能性は十分に推測できる。さらに「音」は、同じ語末子音 [m] をもつ「𠂔」によって異表記されているのだから、語末子音 /m/ の存在は認められるべきであろう。

語末子音 [n] は用例数も多く、また

吞一旦一頓 “谷” [n-n-n]

のように語末子音 [n] をもつ漢字相互間の音相通例も存在する。これは古代日本語の *tani* “谷”とも対応するといわれており、したがって語末の [n] は発音されたものと考えるのが妥当であろう。また高句麗語で“七”を意味する「難隱」という語彙は、古代日本語の [nana] と対応する一方、満州ツングース

諸語の [nadan] “七”とも対応するといわれるが、そうすると「隱」の語末子音 [n] もやはり発音されていたと考えなくてはならない。したがって、語末子音 /n/ の存在も認めてよいであろう。

韻尾に [ng] をもつ漢字の用例は決して少くはないが、これに関する音の対応例からは語末子音 [ng] の存在を裏付けるような資料はいまのところ見当たらない。すなわち、地名で [ng] と [ゼロ] の対応が一例

鳥斯一鳥生 “猪” [ゼロ-ng]

人名で [ng] と [n] の対応が二例

安勝一安舜 [ng-n]

宝迎一宝延 [ng-n]

存在するが、[ng] 相互間の対応例は一例も見出すことができない。この限られた資料だけからすれば [ng] は語末に於ては、むしろ /n/ の異音とみなす方が妥当であろうか。

語末子音 [p] の存在に関しては

甲一甲比 “穴” [p-pp]

という対応例が示唆的である。高句麗語で“穴”を意味する語彙に二通りの表記がなされている事実は、さきに述べたように、方言差ないし曲用形の違いという可能性も考えられるが、いずれにしても「甲比」の「比」の存在から「甲」の語末子音 [p] の発音されたことが推測される。仮に「甲」の語末子音が発音されず、「甲」が [ka] という音を表していたと仮定すると、高句麗語に於ては [ka] をあらわす用字としては「加」が一般的(6例)であるのに、何如ここでわざわざ「甲」を用いなくてはならなかったのかという疑問が湧く。一方「甲」や「甲比」は古代日本語の kafi “峽”と対応する可能性が指摘されているが(村山七郎 1962b; 李基文 1968)、もしこれが事実であれば「甲」の語末子音 [p] は発音されたものとみなすべきであろう。したがって /p/ は語末子音として存在していたと推定される。

新羅語同様、高句麗語に於ても語末子音の [t] が流音化していたことは、次のような例から知ることができる。

忽一溝壑 “城”

於乙一伊犁 “泉”

乃勿一namari “鉛”

高句麗の宰相「泉蓋蘇文」は『日本書紀』に於て「伊犁柯須弥」と表記されているが、「泉」は高句麗語で「於乙」であるから「於乙—伊犁」の対応を得、

「乙」の語末子音 [t] が流音化していたことがわかる。また「鉛」は高句麗語で「乃勿」と表記されているが、これを古代日本語の [namari] と対応させるとき、「勿」の語末子音 [t] も同じく流音化していたことを知る。したがって語末子音 /l/ の存在も認めることができる。

語末子音 [k] に関しては、高句麗語で“赤”を意味する二つの語彙「沙伏沙非斤」の対応例がある。両者がほぼ同じ音を表していたとすれば、語末の「斤」の存在から「伏」の韻尾 [k] が発音されていたと考えられるのではないだろうか。また、高句麗に「王逢県—云皆伯県」と記された地名があるが、李基文氏(1967, 1968)はトルコ語の [bak-] “見る”、エベンキ語の [baka-] “見つける”、満州語の [baha-] “得る”等の語に言及し、高句麗語に「伯」という漢字音であらわされる“逢う”という意味の語が存在していたのではないかと推定している。この推定に従えば「伯」の語末子音 [k] は発音されていたものと考えなくてはならない。他の語末子音 /-p/, /-l/ 等のバランスから考えても /-k/ の存在は認めてよいであろう。

最後にもうひとつ、韻尾音としてはあらわれないが、語末子音 /ts/ の存在について考えてみたい。李基文氏(1968)はは次のような例をあげて高句麗語と日本語およびツングース諸語を比較した結果、前者がしばしば語末子音を欠いている事実を指摘している。

高句麗語	日本語あるいはツングース諸語
xol 「忽」「城」	holo “谷”(満州語)
namil 「乃勿」「鉛」	namari “鉛”(日本語)
tal 「達」「山」	take “嶽”(日本語)
tan 「吞、旦、頓」「谷」	tani “谷”(日本語)
kap 「甲」「穴」	kafi “峽”(日本語)

氏は高句麗語にみられるこのような音韻論的特徴を勘案した結果、高句麗地名にしばしば用いられる「次」[ts'ied] の字を母音のない末子音 [č] の表記であると推定するに至った。事実、「次」という用字はそれ自体では特に意味を表さないにもかかわらず用例が多く(9例)、しかも語頭には決して立たずに「古次、忽次、于次」など語末にのみあらわれる。さらに、語頭および語中にあらわれる /m/ /n/ /l/ /p/ /t/ /ts/ /s/ /k/ の子音のうち、/ts/ と /s/ を除くすべての子音は語末にもあらわれることが今までの考察で明らかになっている(但し /t/ は語末では流音化して /l/ となる)から、この中に破擦音 /ts/ が加えられても何ら不自然ではない。よって李基文氏の推定にしたがい、語末子音 /ts/

の存在も認めることにする。

以上のような考察に基いて推定した高句麗語の子音組織をその異音と共にまとめると次のようになるであろう。

/p/ [p] [pʰ] [bʰ]
 /t/ [t] [tʰ] [dʰ] (但し語頭および語中)
 /ts/ [ts] [tsʰ] [dzʰ] [t̪] [d̪ʰ] [k̪] [k̪ʰ]
 /s/ [s] [z] [ʃ] [ʒ] [x] (語頭および語中)
 /k/ [k] [kʰ] [gʰ] [x] [ɣ] (但し [ɣ₁...]) のとき [ɣ]=ゼロ)
 /m/ [m]
 /n/ [n] [ɳ] (但し [ɳ]=ゼロの場合あり)
 /l/ [l] (但し語中および語末)

ここで上記のように推定した高句麗語の母音組織、子音組織に関して、気付いたことを2、3記してみたい。まず高句麗語の母音組織はつぎのように6母音から成るものと推定した。

<高句麗語の母音組織>

i u
 ö o
 ä a

このうち /i/ と /u/ は中性母音的性格をもつが、残りの母音については /o/ /a/ (後舌) 対 /ö/ /ä/ (非後舌) という母音調和の傾向がみられることが指摘された。

服部四郎氏 (1975; 1976b) によれば、満州文語 (何世紀頃のものを目指すのか明らかではない) の母音組織は次のようなものであったとされている。

<満州文語の母音組織>

i u
 o
 ä a

この言語には /o/ /a/ (男性母音) 対 /ä/ (女性母音) という母音調和がみられるが、一方 /u/ は祖語の段階で /ü/ (あるいは /ö/ も含む) と合流し、/u/ は /i/ とともに中性母音であるという。これを高句麗語の母音組織と対比させると、満州文語の方が非後舌母音をひとつ欠くという点に於ては相違をみせるが、/i/ /u/ が中性母音である点、後舌対非後舌という母音調和の傾向がみられる点等に於て両者は頗る類似することが明らかである。

一方、李基文氏(1974a)は古代朝鮮語(新羅語)の母音組織をつぎのように推定している。

＜古代朝鮮語の母音組織＞

i ü u
 ɔ ɔ
 ä a

氏は、古代朝鮮語が母音調和の確実な証拠を示してくれないとはしながらも、中期語と近代語に於て、早い時期に溯れば溯るほど母音調和の現象が強くみられるという事実を鑑みて、古代朝鮮語には厳格な母音調和が存在したであろうと推測している。そしてそれは後舌母音(u, ɔ, a)と前舌母音(ü, ɔ, ä)の兩系列から成る口蓋的調和であっただろうという。これを再び高句麗語の母音組織と対比させてみると、/u/ が中性母音ではなく /u/ と /ü/ のあいだに音韻的対立が存在するという点に於て相違がみられるが、それ以外の点に於て二つの母音組織はほぼ一致するのではないかと思われる。

このように高句麗語の母音組織が一方では満州文語のそれに近く、他方では古代朝鮮語のそれと類似することは興味深い現象だといえることができよう。すなわち高句麗という国家の発祥地が満州であり、その国家を建設したのは北満州を本拠地とする夫余族の一支族であったこと、しかしながら、やがて朝鮮半島にまで進出し、その結果隣接する新羅、百済とも頻繁に言語接触がおこなわれたと推測されることなどを考慮するとき、これらの母音組織との対比は示唆的であるといえないだろうか。

李基文氏(1968)が高句麗の漢字音は新羅のそれとほぼ似たものであったと推定したことはさきに述べとおりであるが、氏の見解の正しさは音韻組織推定の過程でみていくつかの音の対応例から、ある程度裏付けを得たといえることができる。例えば語頭の [l] は [n] で発音されていたこと(「類利—孺留」)、声母 [ŋ] はゼロになったこと(「耶耶—夜牙」)、語末の [t] が流音化していたこと(「忽—溝獲」)…。これらはみな古代朝鮮語の漢字音の特色と一致するものである。

ここでは中国古代漢字音から上古音と中古音の両方を出して高句麗語の音韻組織を検討したが、その結果、上古音よりは中古音に近いことが明らかにされた。たとえば“口”を意味する「忽次—古次」の対応例をもう一度ふり返ってみると、「忽」は上古音で [m]、中古音で [x] の頭子音をもつが、それが「古」(頭子音は [k]) と対応するためには同じ軟口蓋音である中古音につくべきこと

がわかる。また「古」の母音は上古音で [âg]、中古音で [uo] となるが、それが「忽」の母音 [wâ → uə] と対応するためには [âg] では母音が開きすぎで、中古音 [uo] をとるべきである。他にも「忽—溝漣」「耶耶—夜牙」「波衣—波兮」「菓盧—若友」「朱蒙—鄒牟」など多くの例が中古音につくべきことを示しているが、それらについて再びここで繰り返す必要はないであろう。